

曾利式土器の研究

——内的展開と外的交渉の歴史——

(下)

山形 真理子

5. 曾利式土器と加曾利 E 式土器の関係

5-1 目的と方針

この章では、前章までに論じてきた曾利式編年を念頭に置きながら、関東西部の加曾利 E 式の編年について考える。その中で、加曾利 E 式と曾利式の関係が、双方の型式変遷の上にもどのような影響を与え、どのような役割を果たしたのか、きめ細かく見ていきたい。

加曾利 E 式は関東全域に広がっており、時期によって様々な地域差を内包している。本稿では関東地方西南部、つまり曾利式の分布圏と相接する地域に関心を向けていく。曾利式との関係で常に問題となるのは、神奈川西部、東京西部地域だからである（第19図地図 A、第21図地図 E 参照）。

ここで東京西部というのは多摩丘陵・武蔵野台地とその西方の山地帯、神奈川西部というのは境川・相模川流域と、同じく西方の山地帯である。これらの地域は大局的に見ると、中部山岳地帯の東端に接し、秩父・多摩・丹沢の山地が関東平野と出会うところである。細別時期により違いはあるが、曾利式と加曾利 E 式が拮抗するように各遺跡から出土する地域である。

都心部に隣接するこの地域は、開発がさかんに行われてきたため、遺跡の調査例が多く、膨大な量の土器資料が蓄積されてきた。それらの成果の全てに論及することは無理なことであるため、注目すべき遺跡を選びだしながら、焦点を絞った議論を行ないたい^{註 23)}。

曾利、加曾利 E 両型式がそれぞれその型式本来の変化を示す一方で、両土器型式の接触地帯であるために、そういった地域ならではの特別な土器の動きが看取できそうである。私は、曾利式と「唐草紋系土器」という西の二型式に伝えられた東の加曾利 E 式の影響力は重大であったと認識している。その観点からすると、加曾利 E 式の西への入り口であるこの地域の重要性が浮かび上がる。この神奈川・東京西部地域を通じて、あるいはこの地域を発信源として、加曾利 E 式の影響が曾利式に流入し、土器の様々なレベルに及んだのである。

周知の通り加曾利 E 式土器の編年研究に関する論文や発言は、曾利式や「唐草紋系土器」とは比べものにならない数にのぼる。研究の歴史が長く、現在までに幾つかの細別呼称法が行き渡っている。戸田哲也氏（1980）、米田明訓氏（1980a）が、それまでに提示された加曾利 E 式細別呼称案の系統分類を行った。それによると山内清男説を受け継ぐ加曾利 E 1～4 式、栗原文蔵説を受け継ぐ加曾利 E I～III 式、岡本勇説を受け継ぐ加曾利 E I～IV 式、この 3 つの流れに大きくまとめら

れる。このような状況の中では、私もあらかじめ自分の呼称法の立場を明らかにするべきであろう。

私は、能登氏(1975)、戸田氏、柳澤氏(1985・86b)のそれぞれが唱えたように、型式設定の最初の山内氏の思考に立ち帰ることが基本になると考えている。山内氏の思考の道筋については、柳澤氏が綿密に追証しており、それによれば山内氏の加曾利E式編年が、東北地方の大木式との関係を第一義に考えた、関東北広域編年の一方の柱となる重要な意味を持つものであったことが知られる。また、『日本先史土器図譜』(山内1940)の記述を読みこなせば、この時点で山内氏がすでに加曾利E式4細分を意図していることが知られるのであり、1969年に山内氏が「縄紋草創期の諸問題」に付した編年表で加曾利E1～4式としたのも、決して「密室編年」(米田1980a)と言われる性格のものではないことがわかる。

長野県富士見町で井戸尻遺跡群の調査が進行していた1960年代前半、関東では加曾利E式に関わる重要な調査と研究発表が相次いでいた。1962年の栗原文蔵氏による世田谷区大蔵遺跡の報告、そして翌年に出された岡本勇氏による横須賀市吉井城山貝塚の報告は、ともに加曾利EⅡ式より新しいと考えられる土器を加曾利EⅢ式と呼称し、しかも両者のEⅢ式の内容が必ずしも同じではなかった。吉井城山は、貝塚からの層位的出土資料であり、おおむね、上部貝層直下の加曾利EⅡ式→上部貝層の加曾利EⅡ+Ⅲ式→上部貝層直上の加曾利EⅢ式+称名寺・堀之内Ⅰ式、という出土状況が報告されている。さらに貝層直上発見の一部の土器について、加曾利EⅢ式につづくもの、加曾利E式と称名寺式とのあいだに存在する空白をみたくかもしれないものとして、いずれ新しい型式として認定されるべきもの、とも述べられた。のち1965年の『日本の考古学』において「加曾利EⅣ式」の名称が、巻末の編年表の中に登場する(鎌木編1965)。この吉井城山の加曾利E式編年は今日も影響力が大きい。同じ年に茨城県岩坪貝塚の概報で、杉山荘平氏がやはり加曾利EⅢ式と称名寺式との間隙を埋めるとされる資料に、加曾利EⅣ式の名を冠することができるかもしれない、と書いている(杉山1965)²⁴⁾。

このような、関東地方の加曾利E式の盛んな、しかし複雑な研究状況を、井戸尻の研究者たちはどのように見ていたのであろうか²⁵⁾。1965年の『井戸尻』の刊行によって世に出たいわゆる井戸尻編年は、見事に並んだ中期の土器編年によって、大きな反響を呼んだ。その様子を『井戸尻』刊行に併せて企画された長野県考古学会によるシンポジウムの記録に見ることができる(藤森・武藤・戸沢ほか1965)。

『井戸尻』の後の曾利式研究の経過については既に略述した。そこでは、曾利式研究が最初からはらんでいた問題点、つまり加曾利E式との関係という視座が十分に定まっていなかった点が、現在でも克服されていないことを述べた。

曾利式研究の上でも加曾利E式研究の上でも画期となった神奈川考古シンポジウム(1980)では、加曾利E式についていわゆる神奈川編年(神奈川加曾利E第Ⅰ期～Ⅳ期)、東京編年(第Ⅰ～Ⅶ段階)という、二つの編年が並び立つこととなった。この違いは、神奈川編年が加曾利E式の紋様帯構成の変遷に重点を置いたのに対し、東京編年が紋様モチーフの変遷を重視したためと説明

される。が、もともと土器型式に対する考え方の枠組みの違いが根底にあったと思われる。

1982年に発表された埼玉県研究者グループによる「縄文中期土器群の再編」は、埼玉編年と呼んでもよいであろう（谷井・宮崎・大塚ほか1982）。中期全体、埼玉を中心に東京、千葉の資料を網羅的に集成している。中期の初めから終末までⅠ～ⅩⅣ期、つまり14段階に編成され、そのうち中期後半の加曾利Ⅴ式の関連はⅨ～ⅩⅣ期の6段階である。Ⅸ期とⅩⅡ期が2細別されている。

埼玉編年の加曾利Ⅴ式段階区分は、Ⅸa・Ⅸb・Ⅹ期が加曾利ⅤⅠ式、ⅩⅠ・ⅩⅡa・ⅩⅡb期が加曾利ⅤⅡ式、ⅩⅢ期が加曾利ⅤⅢ式、ⅩⅣ期が加曾利ⅤⅣ式に対比されており、明記されているようにこれは岡本勇氏の編年の枠組みに沿ったものである。しかし、中期全体を対象として扱ったこと、また従来の型式名称が錯綜していることから、従来の呼称にとらわれず、「…地域と年代の単位という最も簡素な観点から」土器群の類別を行ない「時期の設定は、任意に区切り、第何期という無機能的な呼称法をとった。」（谷井彪氏による）。

またも一地域に関わる段階編年が別個の番号を付されて出現したことで、正直なところ、わかりにくい状況になっている。行政区域で区切られるのではなく、また便宜的に設定された時期区分ではなく、実体のある土器型式を認識していく努力が必要である。

それはともかく、埼玉編年の加曾利Ⅴ式関連には評価すべき点が多い。私は特に、埼玉編年の第ⅩⅡ期が、神奈川考古シンポジウムでは明瞭に把握されていなかった時期である点に注目したい。第ⅩⅡ期は、加曾利Ⅴ式の胴部の磨消縄紋が発生する直前段階で、それ以前の加曾利Ⅴ式が普通に持っていた頸部無紋帯が失われていく時期でもある。また、連弧紋土器が成立し、この直後の時期に爆発的に広がる。山内清男氏が最初に加曾利Ⅴ式古と新とを分けた、その境目に関わるような時期である。私も、これを一段階として認識することは必要であると考えている。

さらに、何人かの研究者が西の船元式・里木式、また咲畑式に由来を求めている連弧紋土器について（能登1975、桐生1981、秋山1985、岩瀬1994）、埼玉の研究者は在地の由来であると考えており、西関東の多様な土器の要素が組み合わされる中で連弧紋の出現を考える必要を説いている。この点も傾聴すべき指摘であると考えている。

さて、神奈川考古シンポジウム、翌1981年の日本考古学協会（栃木県）におけるシンポジウム「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」の開催、そして1982年の埼玉の集成と、80年代初頭に関東地方各地の中期編年研究が一斉に出揃った結果、その後の80年代を通して、加曾利Ⅴ式をめぐる研究は比較的低調であった。その中で、柳澤清一氏は中期後半の土器編年に関する論文を意欲的に発表している（加曾利Ⅴ式に直接関わるものが、柳澤1980・1985・1986ab・1990・1991ab・1992）。

1991年時点での柳澤氏の編年案は次のようなものである（柳澤1991a）。

大木 8 a	加曾利 E 1	曾利（古々）
大木 8 b	加曾利 E 2	曾利（古）
大木（8 - 9）	加曾利 E（2 - 3）	曾利（新）

大木 9	加曽利 E 3	曽利 (新々)
大木 9 - 10	加曽利 E 3 - 4	(金の尾)
大木 10	加曽利 E 4	(釈迦堂)

このうち、大木(8-9)、加曽利 E(2-3) 中間式、そして大木 9-10、加曽利 E 3-4 中間式が柳澤氏によって提唱されている細別型式である。もっとも氏によれば、後者は既に山内氏によって将来的に明確になることが予見されていた。

柳澤氏は曽利式について編年図表の一部に組み入れており、ここでは慎重に、曽利 I 式～V 式の語を使うことを避け、古々、古、新、新々という仮の名を与えている。(新々)の後、(金の尾)・(釈迦堂)の段階分けについて、私の考えは柳澤氏と近い。ただし、私は後者を一の沢 1 号住の典型的な加曽利 E 4 式を代表として「一の沢 1 号住段階」と呼んだ。

曽利式と加曽利 E 式の両者を取り上げた研究として、最近の黒尾和久氏の論稿がある(黒尾 1995)。黒尾氏の編年は土器の出土状況の吟味によって導き出された時間序列ということであるが、土器編年そのものとしても評価すべき内容となっている。西関東地域について、連弧紋出現期のヴァリエティの豊かさに特に注目し、その背景に曽利縄文系の連動を見る点は、私と同様の認識を示す。

ここで、私が加曽利 E 式編年研究にどのような視点をもって関わるのか、確認しておきたい。私は基本的に山内清男氏以来の加曽利 E 1～4 式編年に則って記述を進める。私の曽利式の細分型式が、加曽利 E 1～4 式の編年体系とどのようにかかわっていくのか。曽利式が加曽利 E 式と最も直接に接している関東西部を中心に、厳密に考えることとしたいのである。

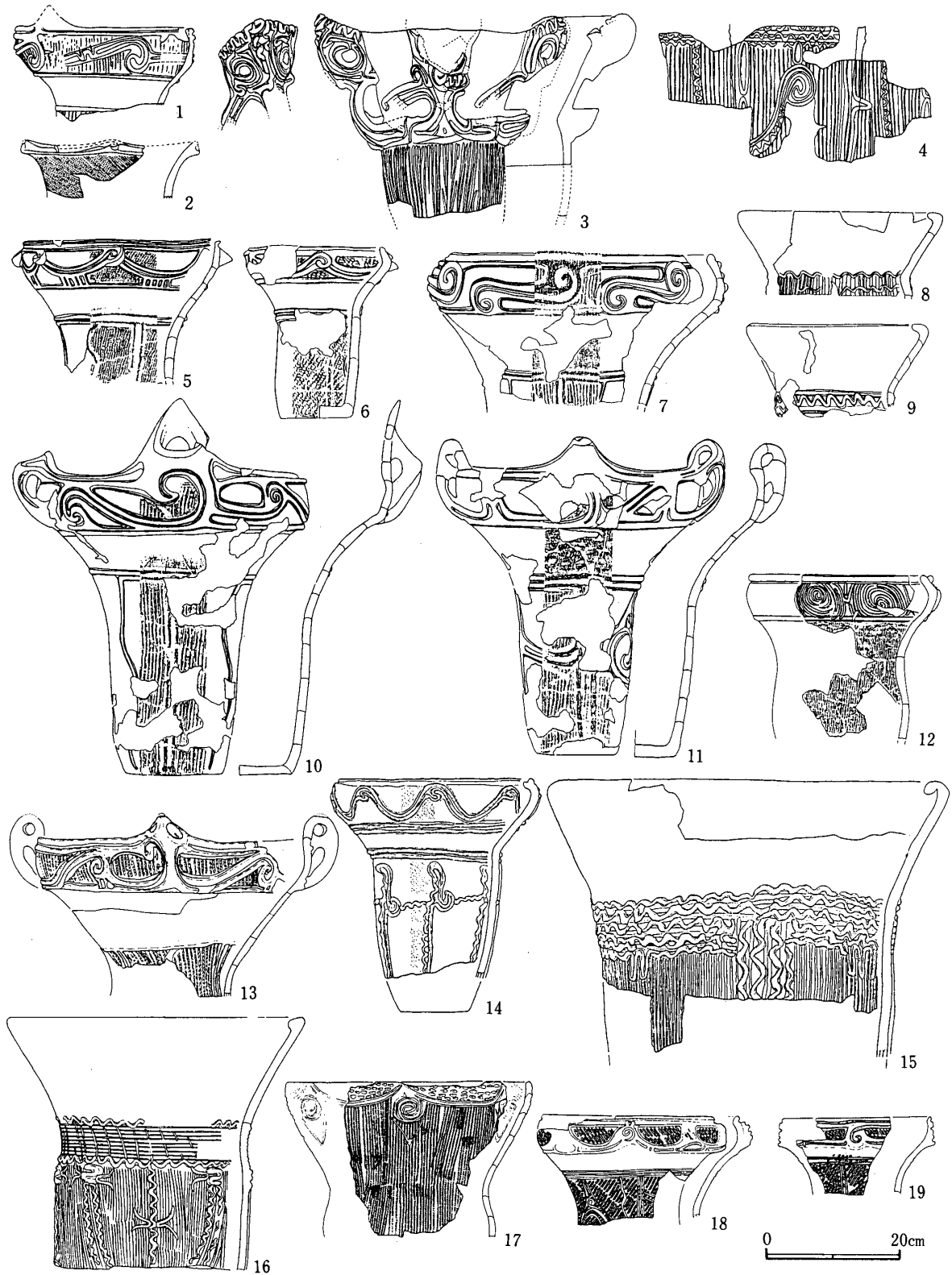
山内清男氏の紋様帯系統論において、「中期の後半加曽利 E 式或いは、その併行型式においては、(中略) I. 口頸部の文様帯と II. 体部の文様帯が上下に重ねて加えられている。」(山内 1964)、つまり加曽利 E 式は I. + II. という構成が普遍性を確立した土器型式として意味づけられている。現在までの編年研究は、加曽利 E 式における紋様帯の重なり方の変遷に注目してきている。一方、その口頸部紋様帯と体部の紋様帯に展開する紋様の変遷も、研究の重要な柱である。先行研究が重視してきたこの二種の変遷は、今後の研究が常に念頭に置かなければならないものである。

さらに、私の考察の中心に曽利式があるため、それとの関連が深いと思われる土器群の問題に切り込んでいきたい。後に詳しく述べる通り、特に関東の西部では、連弧紋土器、曽利縄紋系土器、さらには何ともカテゴリー化しにくいのだが、口縁部に紋様帯をもち、くびれる胴部の中半に横走沈線を引き、胴部を上半と下半に画するという構成をとる土器(胴部分帯型土器)が相当量出土する時期がある。それらが加曽利 E 式と曽利式の双方といかなる関係を持ちながら生成発展したものであるのか、厳密に追及していくことは困難な課題である。ただしそれらを抜きにしては、曽利式と加曽利 E 式の影響関係を深く論じていくことは無理であろう。

5-2 加曽利 E 1 式・E 2 式

まず、東京・神奈川西部地域の加曽利 E 式の変遷について概観したい。

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）



第23図 東京・神奈川西部地域の加曾利 E1・E2 式並びに伴出する曾利古1・古2式 (1/10)

1~4 当麻4号住, 5~10 宇津木台D地区 SI59, 11・12 宇津木台D地区 SI07B, 13 橋本 SI35号住埋甕, 14・15 嵯峨12号住 14は埋甕 15は炉体, 16~19 上坂東8号住 16は埋甕

山形 眞理子



第24図 東京・神奈川西部地域の加曾利E2式並びに伴出する曾利古2式 (1/10)

1~23 当麻18号住

加曾利 E 式最初頭の遺構は、多くはない。曾利古 1 式土器はこの地域で散見されるが、単純に加曾利 E 1 式と伴出した例を見出すことは難しい。関東地方で勝坂式が加曾利 E 式に変化していく時期、一つの住居から両者が伴出することは珍しくなく、西部関東の場合、それにわずかに曾利古 1 式が入る状況が想定される（白石1978）。多摩ニュータウン No67 遺跡の 4 号住では、4 A 号住の埋甕炉が井戸尻Ⅲ式、4 B 号住の埋甕が加曾利 E 1 式の胴部下半で、覆土には曾利古 1 式が加曾利 E 1 式と共に入っている（可児・塩野崎ほか1995）。

当該地域の加曾利 E 式研究において中心的な役割を果たしてきたのは相模原市当麻遺跡である（白石ほか1977）。中期の竪穴住居址76軒、中期～後期の敷石住居址10軒が発見された当麻遺跡の資料を見通すと、復元実測された土器が60個体以上という18号住の資料が際立っている。報告書によれば、これらは住居址中央部に密集する吹上パターン状の出土状態を示し、住居廃絶直後に多量の土器群が投棄されたことをうかがわせるという。当麻18号住の場合、その加曾利 E 式は比較的良く型式上のまとまりを示しているようである（第24図）。特徴を列挙すると、

- ①口縁部紋様 横 S 字紋が多い。横 S の間を埋める区画が出現している
(口縁部紋様帯区画化が始まっている)
- ②頸部無紋帯 有
- ③胴部紋様 縄紋地紋上に沈線による垂下紋 磨消縄紋は無
- ③連弧紋土器 無

これらは加曾利 E 2 式の範疇で捉えられるものであろう。この当麻18号住で伴出した曾利式は、加曾利 E 式に比べて少量である（第24図17～21）。それらは曾利式の型式特徴をよく体現しているものもあれば（17）、省略形、あるいは無紋口縁が曾利式であるが胴部の構成は加曾利 E 式という、いわば折衷型の土器もある。しかしとにかく、この時期の加曾利 E 式に伴って出る曾利式は、外反・内彎する無紋口縁部を持つ一群であり、曾利古 2 式に比定される。

当麻18号住と同類の加曾利 E 式を出した遺跡は多い。八王子市下寺田遺跡 SB07号住では、この種の加曾利 E 2 式と、曾利古 2 式としてよい土器群が共伴している（新藤・服部ほか1975）。

神奈川考古シンポジウムでは、神奈川のⅡb・c期が当麻遺跡18号住、54号住、56号住を基準に設定された。問題になったのはその直前のⅡa期である。神奈川の研究者が、頸部無紋帯が成立し地紋に撚糸紋を多用する時期というのを一段階として考えたことに、批判が出された。この神奈川Ⅱa段階相当のまとまった資料としては、八王子市宇津木台遺跡 D 地区 SI59をあげることができる（第23図5～10）。加曾利 E 式は口縁部に波状に盛り上がる把手がつくものがあり（10）、胴部の懸垂紋も隆帯で表現するものが多い。当麻18住の加曾利 E 式土器群とは一見して異なる。

私は神奈川編年がこの一時期を画したことは妥当であったと考えている。最近では黒尾和久氏が、「加曾利 E 2 b 期」という名称でこの土器の段階を区別している（黒尾1995）。相模原市橋本遺跡 SI35の埋甕がやはり口縁部把手付の加曾利 E 式であり（第23図13）、橋本遺跡で知られる限り最も古い土器であるとされる（大貫・小西ほか1986）。つまり、橋本遺跡は中期後半のこの時期から集

落の形成が始まっているのである。なお、このような土器に、加曾利 E 式の特殊な一類型として口縁部に同心円状の多重の渦巻紋をもつ土器が伴出する例が多い（例：第23図12）^{註26)}。

神奈川編年の通り、この次の段階に当麻遺跡18号住の加曾利 E 2 式が来るのであろう。第23図と比較しながら第24図を見ると、加曾利 E 式の紋様帯の構成は変わらないが、胴部は沈線 3 本による表現が普遍的となり、地紋は縄紋が卓越するようになる。口縁部が波状に盛り上がることはなくなり、紋様も平板になり、口縁部紋様に区画化の傾向が見られるようになる。

当麻18号住には連弧紋が入っていない。この直後に連弧紋をもつ時期が続くのであろうか。加曾利 E 式の伝統的な器種であるキャリパー形の口縁部に渦巻紋をもつ深鉢は、西関東で連弧紋が盛行する時期になると、その陰に隠れてしまうかのように量が減ることはよく知られている。

私は、この当麻18号住の加曾利 E 2 式の次段階に、埼玉編年（谷井・宮崎・大塚ほか1982）が埼玉県北足立郡伊奈町大山遺跡（金子・樋口1982）の資料などを根拠に設定した一時期を、挿入すべきだと考えている。加曾利 E 式のキャリパー形口縁部をもつ深鉢について、胴部紋様がせり上がって頸部無紋帯がなくなり、しかし胴部には加曾利 E 3 式の磨消帯が未だ成立していない段階である。口縁部紋様の区画化は、当麻18号住の加曾利 E 式に比べ、一段と進んでいる。

連弧紋の出現する時期に関して、八王子市滑坂遺跡の在り方は重要である（佐々木・藤野ほか1988）。滑坂遺跡には、連弧紋はわずかに破片でしか入らない。丘陵上の環状集落は連弧紋が西関東で急激に伸長し、伝統的な加曾利 E 式を一時消滅させるような勢いに達する時期の直前に、終焉を迎えている。この滑坂遺跡で最も新しい加曾利 E 式（第25図11）は、頸部無紋帯を失い、口縁部はすっかり区画化が進んでおり、胴部の三本沈線間を磨消とすれば加曾利 E 3 式が成立するような資料である。なお、この土器は口縁部区画内は縄紋であるが胴部は条線を地紋としている。

この時期の代表例として、埼玉編年では大山遺跡や八王子市栢田第Ⅲ遺跡 8 号住が上げられている。それに神奈川県城山町川尻遺跡 J18号住を付け加えることができよう（第25図 1～10）。

以上をまとめると、私の考えでは、加曾利 E 式はその成立のあと、

宇津木台遺跡 D 地区 SI59号住に代表される時期（神奈川編年のⅡa 期）



当麻遺跡18号住に代表される時期（神奈川編年のⅡb・c 期）

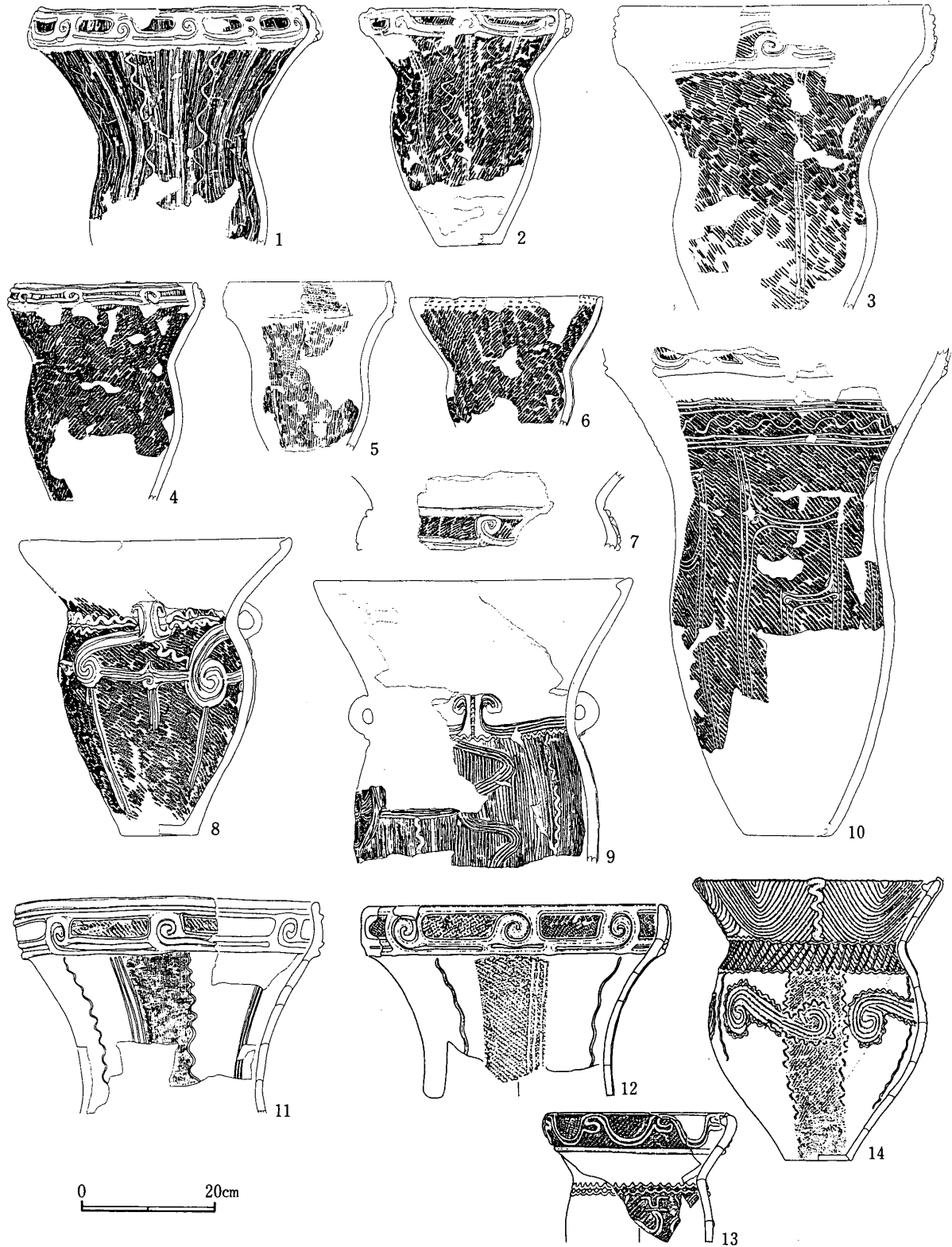


川尻遺跡 J18号住に代表される時期（埼玉編年のⅪ期）

という三段階の変遷を経ており、宇津木台遺跡 D 地区 SI59段階が加曾利 E 1 式、後の二つの段階が E 2 式に比定されると考える。

ここまでは、加曾利 E 式本来の伝統を受け継ぐキャリパー形土器が主体を占めているため、その変遷を理解することが編年研究の根幹となった。その方針は従来の研究の成果を受けたものである。この段階までは、おおむね曾利古 1、古 2 式が伴出している。この次の段階に、当麻72号住の

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）



第25図 東京・神奈川西部地域の加曾利 E 2 式並びに伴出する曾利古 2 式 (1/10)

1~10 川尻 J18号住, 11 滑坂 S184 炉体, 12~14 二宮 3 号住

ような多彩な、しかし理解のしにくい土器群が位置付けられると思うのである。

5-3 「当麻遺跡72号住」土器群をめぐる諸問題

5-3-(1) 土器群の構成

当麻18号住を、ほぼ一つの時期を画するものと認定するならば、同じ遺跡の72号住（第26図1～12）との土器内容の差は歴然としている。この住居の出土土器も多量である。この72号住には連弧紋土器があるが、図になっているものを見る限り典型的なキャリパー形加曾利E式がない。土器群の構成は（第26図）、

- ①曾利式の斜行沈線紋土器 9・10
- ②曾利式の曾利縄紋系土器 8
- ③胴部中央の括れ部に、曾利式類似の両耳把手をもつ土器 6
- ④加曾利E式の体部紋様のみをもつ土器 4・5
- ⑤加曾利E式の口縁部をもつが、通常に加曾利E式と胴部が異なり、胴部中央の括れ部の横走沈線で胴部上半と胴部下半に分帯する構成をとるもの 3
- ⑥連弧紋土器 1・2
- ⑦その他

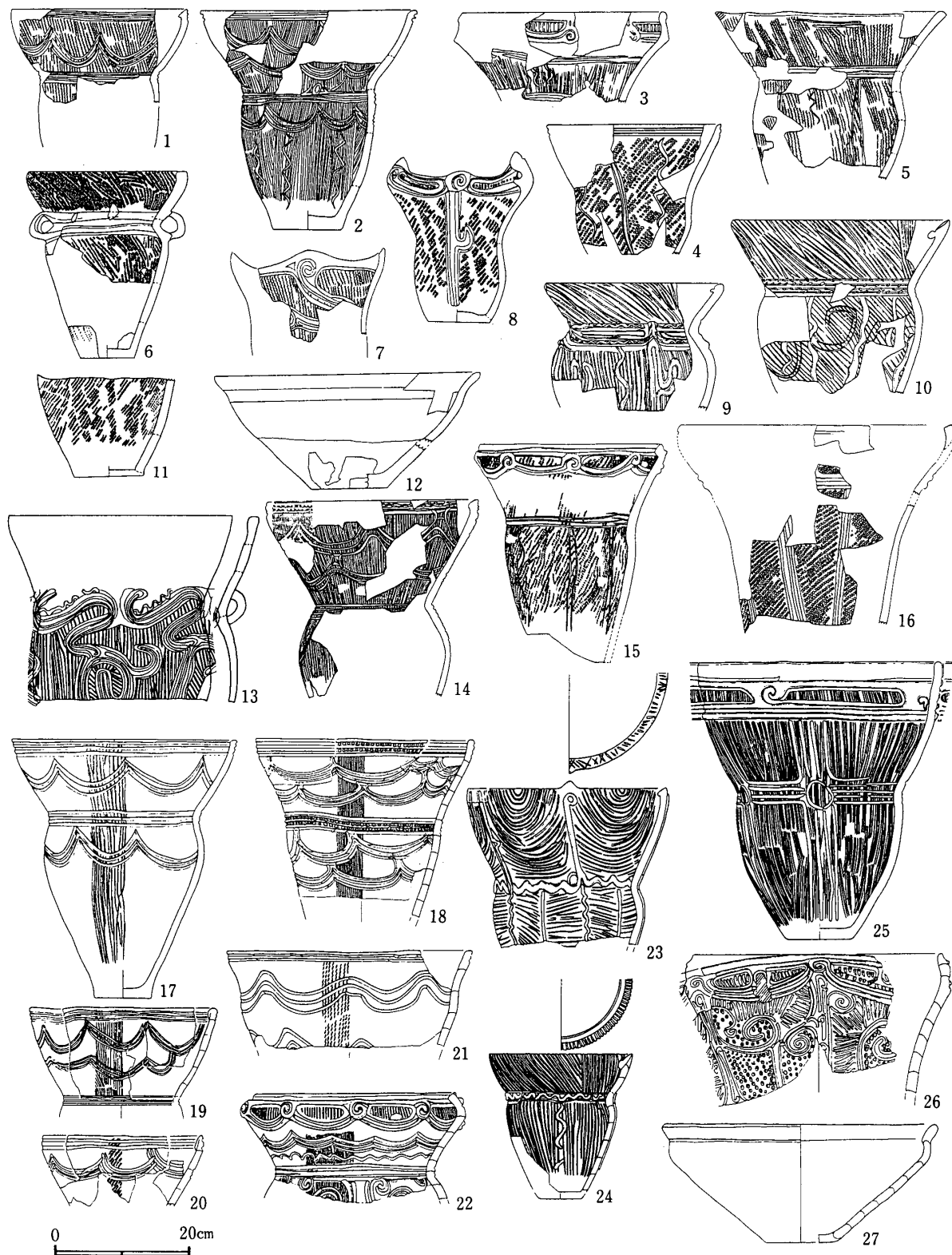
加曾利E式と曾利式、と言う風にすっきり両断することができない、説明しにくい資料群である。当麻遺跡で同種の土器を出土した住居に10号住（第26図13～16）、また22、26、69号住がある。このような土器の組み合わせを持つ遺構は関東西部一帯より幾つも報告されている^{註27)}。よって、様々な要素の寄せ集めのような、ヴァリエティに富む組み合わせを、一時期を代表するものと認識しなければならないと考える。

当麻72号住の土器を見ると（第26図1～12）、上記①～⑥のカテゴリーに関わりなく、いくつかの共通の特徴が見て取れる。まず、器形が似ている。いずれも胴部中半で明瞭に括れている。そして胴部上半から口縁部は外反もしくはやや内彎しながら開き、胴部下半は膨らんでいる。ただし口唇部の形態など細かい部分では、類型ごとの差異が認められる。器面の分帯方法の類似も大きな特徴で、胴部括れ部の横走沈線（または隆帯）で、胴部上半と下半に分けている。

これら土器群については、連弧紋、曾利縄紋系の問題と直結するため、その編年的位置と系統的な位置について論じるべき問題は多い。ここでは、編年と系統の二つの問題を念頭において、上に仮に分類した類型の各々について考えていきたい。

まず、①の斜行沈線紋土器と②の曾利縄紋系土器は、前章までに論じたように、曾利式の中の類型である。③の、胴部中半に両耳把手を持つ深鉢は、数は少ないが山梨から西部関東にかけて存在している^{註28)}。①②③三者の組み合わせは曾利古3式のものであるが、その三類型ともに曾利新1式まで残存するので、時間幅をもって考えておくべきである。

加曾利E式系統の土器と考えられる④（第26図4・5）は、加曾利E2式の体部紋様（縄紋地



第26図 東京・神奈川西部地域の加曾利 E 2-3 式（当麻72号住段階の土器群）（1/10）
 1~12 当麻72号住 5は埋甕, 13~16 当麻10号住 15・16は埋甕, 17~27 恋ヶ窪5号住 23は埋甕

紋の上に沈線紋)が連弧紋土器の器形に転移して、しかも加曾利E2式の口縁部紋様帯が省略されて、土器全体が加曾利E2式の体部紋様一色になったものと理解することができる。

5-3-(2)「胴部分帯型土器」をめぐる問題について

⑤(第26図3)は、ここで仮に「胴部分帯型土器」と名前を与えておきたい。この類型の土器は、西関東の遺跡からかなりの量出土している。この土器群は口縁部紋様帯をもち、胴部は上半と下半に分帯され、上下別個もしくは同種の紋様をつけられる(例:第26図15・22・25)。

これら土器群の口縁部、胴部の紋様の種類は限られている。それは以下のように分類される。記号は便宜的なものであるが、4-1-(4)曾利新式について、で用いた記号と共通している。

口縁部紋様	A 加曾利E式の紋様、もしくは A' その変異形
	B 曾利式の肥厚帯口縁
	C 曾利縄紋系の紋様(渦巻つなぎ弧紋など)
	AB 加曾利E式と曾利式の肥厚帯口縁をミックスしたような紋様
胴部上半紋様	m 無紋
	u 胴部下半と同じ地紋条線
	i 胴部下半とつながる交差点状区画紋様
胴部下半紋様	F 加曾利E2式の胴部紋様
	H 連弧紋、もしくは H' その変異形
	G 沈線渦巻紋 J 沈線J字紋
	I 胴部上半とつながる交差点状区画紋様
胴部地紋	j 縄紋 y 撚糸紋 u 条線 v 列点紋

「胴部分帯型土器」は西部関東のみならず、甲府盆地、八ヶ岳山麓、静岡県域にもあり、曾利式分布圏にいきわたっている土器であると言える。その例をあげてみる。

<東京西部・神奈川西部>	口縁部	胴上半	胴下半	胴地紋	
当麻10号住	C	m	F	j	(第26図15)
当麻22号住	A	m	H	u	
橋本 SI38	B	m	G	j	
恋ヶ窪 5号住	A	i	I	u	(第26図25)
留原 8号住	A'	u	I	u	
<甲府盆地・八ヶ岳・富士山麓>					
釈迦堂 SⅢSB105	C	m	F	j	(第14図7)
柳坪 A1号住	C	m	G	u	(第5図24)
柳坪 A2号住	AB	i	H'	u	(第5図19)
棚畑32号住	AB	m	H'	u	

この様に「胴部分帯型土器」を概観すると、紋様帯構成を共通のものとしながらも、口縁部紋様、体部紋様のそれぞれに上記のヴァリエーションがあり、その組み合わせの変化が、でき上がった土器の差として現われていることがわかる。

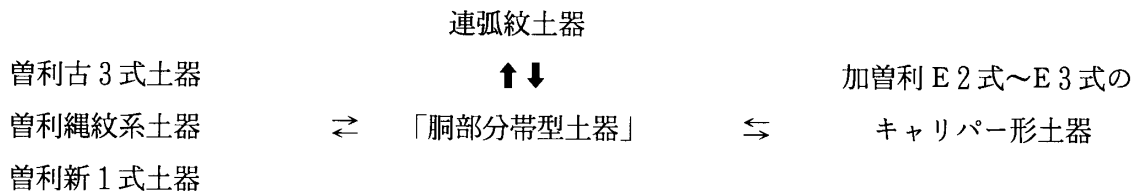
口縁部紋様は、加曾利 E 2 式から E 3 式のキャリパー形土器と同じ紋様がつく場合が多いが、曾利式の肥厚帯口縁や曾利縄紋系土器の渦巻つなぎ弧紋など曾利系の紋様がつく場合もあり、さらに複雑なことには、その両者の要素を組み合わせた、独特の口縁部紋様も誕生している。

体部の紋様では、代表的なものは連弧紋である。その形を少し変えた連弧紋の変異形と理解される紋様も多い。交差点状の紋様というのは、田の字区画（末木1981）とも呼ばれることからわかるように、主に3本沈線で、胴部括れ部を中心に体部上半も下半も枠状に区画する紋様である。交差点の下半のみを連弧紋に置き換えたものもある。

「胴部分帯型土器」の中には地域差も認められる。地紋列点紋は八ヶ岳地域に多い。西関東には斜めに傾く独特の渦巻紋がある（例：当麻72号住の第26図7の土器にみられるような紋様）。

上に述べてきたような紋様の変異を踏まえて「胴部分帯型土器」をどのように理解するべきかという、加曾利 E 式とも曾利式とも、また連弧紋土器とも言うことができない、その三者の要素を取り入れることによって成立している土器群ということになる。

この類型⑤の胴部分帯という構成は、実は他の類型と共通しているのであり、しかも⑤の成り立ち自体が各種要素の混合であるから、他の類型との紋様の交換が容易に行われる。つまり、類型⑤「胴部分帯型土器」は容易に他の類型に代わることが可能である。明確な口縁部紋様帯が抜け落ち、胴部上半にも連弧紋をつければ、それは⑥連弧紋土器となる。加曾利 E 2 式の胴部紋様だけになれば④となる。やはり口縁部紋様帯が抜け落ちて、土器全体が交差点状紋様になったような土器は、3本沈線が卓越することから⑥連弧紋土器のヴァリエティと理解することもできる。また、口縁部紋様帯が加曾利 E 式のもので、胴部の紋様も E 2 式のものであったら、それは加曾利 E 式の典型的なキャリパー形土器に非常に似てくるのである。



このような構造の中で存在していると考えられるのが「胴部分帯型土器」である。連弧紋との関係を太い矢印で示したのは、それとの関係が最も緊密ではないかと考えているからである。この「胴部分帯型土器」は、連弧紋の中心地域である武蔵野地域に隣接し、曾利式分布との接触地域で

もある、多摩丘陵から相模川中流域、すなわち私が今問題としている地域で誕生した可能性が高い。そして「胴部分帯型土器」は、分布の上からは西の曽利式分布圏によく受け入れられたのである。

5-3-(3) 連弧紋土器の出現と盛行について

ここで連弧紋土器について私の考えを述べておきたい。

連弧紋土器については、山内清男氏が『日本先史土器図譜』の中で「これらの土器は板橋区中新井弁天遺跡発掘の結果、85, 86, 87の如き土器（キャリパー形深鉢—筆者註）とは別の型式に属することが明になった。しかし、その前後関係、型式の精密な内容に就ては未だ考慮の余地がある。加曽利E式の新しい部分に属することは疑いない点である。」と説明して以来（1940）、多くの研究者が関心を寄せてきた。戦前に佐野大和氏は、横浜市青ヶ台貝塚の報告の中で連弧紋土器をキャリパー形の加曽利E式と明確に類別し、しかもそれらを「東京府檜原、伊豆見高、駿河小山から武蔵相模にかけて甲州方面に分布する厚手系土器」すなわち現在の曽利式土器と対比させている（佐野1943）^{註29)}。1956年に吉田格氏は、国分寺市（当時国分寺町）恋ヶ窪で戦後すぐに塩野半十郎氏が発掘した竪穴住居址の加曽利E式土器を報告し、「弧線紋ある土器」を、山内清男氏の記述を参考にして、それまで発見されている加曽利EⅡ式とは異なる別の一型式として認められるとした（吉田1956）。吉田氏はこの連弧紋土器の一群を加曽利EⅢ式と呼称するようになる（吉田1956「東京都玉川野毛町公園内遺跡」、のち吉田1973所収）。

一方、山内氏の文章中に現われた「別の型式」を「別系統の土器」と解釈した能登健氏は、「私は連弧文土器の系統をその器形・文様などから近畿・瀬戸内地方の醍醐Ⅱ式・里木Ⅲ式土器のなかに見い出したいと思っている。」（能登1975）と、連弧紋土器を西の土器型式に結び付ける説を公にした。その前年、日野市平山橋遺跡の報告において、高林均氏が「この土器の器形、文様要素には曽利式土器の影響が窺える。おそらく本地域においてその影響の下に独自に消化した形で成立した土器であろう。」（高林・小田ほか1974）という系統観を披露したのと対照的であった。

能登氏以来、連弧紋を東海以西の土器型式と結び付ける考え方は有力であり、桐生直彦氏が東海の咲畑式土器に、秋山道生氏が関西の船元Ⅲ、Ⅳ式と咲畑式に、連弧紋の淵源を求めた（桐生1981, 秋山1985）。ただしいずれも、相当な地理的隔たりにもかかわらず、両者の中間地域の状況を踏まえた伝播のプロセスが明らかではない。最近では岩瀬彰利氏が船元式～里木Ⅱ式、及びその影響下で成立した咲畑式と、西関東の連弧紋との中間地域をつなげる努力を行っているが、納得のいく説明になっているとは言い難い（岩瀬1994）。実際のところ、咲畑式の弧線紋と関東の連弧紋を結び付ける前提となる、両者の厳密な編年対比の問題が残されたままになっている。

いわゆる埼玉編年では（谷井・宮崎・大塚ほか1982）、そのⅪ期に連弧紋土器が成立するとされるが、成立の契機に関して次のような意見を述べている。「多摩地方を中心とする地域は、Ⅺ期直前段階の遺跡数が少なく、おそらく加曽利E式側の勢力が弱かったものと思われる。これは、曽利式側の進出を容易にさせ、加曽利E式との折衷的な土器群の成立、または、加曽利E式に代わ

る在地の土器としての連弧紋土器の成立・発展を可能ならしめた要因の一つとして考えることが出来よう。」（金子直行氏による）。

私も、連弧紋土器の系統を西日本に求める必要は無いと考えている。連弧紋土器の出現と盛行という現象は、当麻遺跡72号住の組み合わせを手がかりに見てきたような、西部関東の土器群全体の動きの中に位置付けられるべきである。だとすれば、やはり加曾利 E 式と曾利式、特に曾利縄紋系との接触の中で武蔵野地域に成立した在地の土器群、と理解するべきである。連弧紋土器の器形は、曾利式の中でも曾利縄紋系土器に最も近いものであり、連弧紋という紋様自体も、曾利縄紋系の最も古い土器の口縁部紋様に由来を求めることが可能である。

というのは、既に述べたように、曾利縄紋系土器群のうち口縁部に沈線弧線紋がつくものは曾利古 2 式の段階で既に存在しており、西部関東でも伊勢原市上坂東遺跡で曾利古 2 式・加曾利 E 2 式と伴出している（第23図16～19）。さらに、相模湖西岸の藤野町嵯峨遺跡12号住の埋甕は、加曾利 E 式と曾利式の折衷の所産としては初期のものだが、そのキャリパー形の口縁部に粘土紐による弧線紋がつけられていることも見た（第23図14）。このように、「弧線紋」という紋様の系譜が連弧紋出現以前の隣接地域に存在していたことには注目しなければならない。

連弧紋土器出現と盛行の時期について述べると、既に論及したように、八王子市滑坂遺跡の最終の加曾利 E 2 式（SI84号住炉体土器、第25図11）の時期が、出現期にあたると思われる。調布市飛田給遺跡（小野崎・赤城ほか1983）SI10号住では、床面～覆土下層より相当量の連弧紋土器が出土している。この住居の炉体土器が、滑坂 SI84号住の炉体と同種の加曾利 E 2 式である。この飛田給遺跡 SI10号住の出土土器は、若干の時期幅をもつと思われるが、連弧紋土器群の他に曾利古 2～古 3 式土器、胴部分帯型土器、斜行沈線紋（重弧紋）土器、それらの要素をミックスした土器など、まさしく当麻72号住と同様、様々な系譜の土器の寄せ集めのような状況を呈している。その中で加曾利 E 式のキャリパー形土器は、炉体土器を含め 3 個体しか図示されていない。

連弧紋分布の中心は、国分寺市恋ヶ窪遺跡に代表される武蔵野地域である。恋ヶ窪は野川の水源近くにあるが、その野川を 4 km ほど下ったところに位置する小金井市中山谷遺跡では、加曾利 E 式中頃に集落が断絶し、E 4 式の柄鏡型住居の時期になって居住が再開する（伊藤・中山ほか1987）。つまり連弧紋の時期が全く抜けているのである。ここでは加曾利 E 式は当麻遺跡18号住と同類の E 2 式までであり、滑坂遺跡 SI84や川尻遺跡 J18号住でみたような E 2 式は見当たらない。よって、連弧紋の出現を加曾利 E 2 式の後半（川尻遺跡 J18号住段階）とすることは合理的である。

連弧紋土器の盛行期は、その次の段階、すなわち当麻遺跡72号住の時期である。恋ヶ窪遺跡で連弧紋にどのような土器が伴出しているか見てみると、吹上パターン状に多量の遺物を出した 5 号住居址では、連弧紋の他、曾利式（斜行沈線紋土器、重弧紋土器）、「胴部分帯型土器」があり、やはり当麻遺跡72号住の類型と重なっているのである（第26図17～27）。

5-3-(4) 「当麻72号住」並行期の評価

最後に、当麻遺跡72号住の並行期について以上に論じたことをもとに、私が特にこの段階について注目した意味を述べてみたい。

1. 東京西部・神奈川西部地域において、加曽利 E 2 式は、当麻遺跡18号住の時期と、川尻遺跡 J18号住に代表される時期と、二段階に分けて考えることが可能である。加曽利 E 1 ~ E 2 式では、キャリパー形深鉢が加曽利 E 式の組成の中心を占め、その変遷が時期細分の重要な指標となった。なお、川尻遺跡 J18号住に代表される時期すなわち加曽利 E 2 式後半に、武蔵野地域を中心に連弧紋土器が成立したと思われる。

2. 連弧紋土器の出現は、加曽利 E 2 式と、曾利古 2 式並行の曾利縄紋系土器との接触の中に要因を求めるべきであり、咲畑式など西日本の土器型式に直接の祖形を求める必要はないと考える。連弧紋土器が加曽利 E 式を量的にしのいで盛行するのは次の段階であり、それは以下に述べるような特徴的な状況の中で理解することができる。

3. 川尻遺跡 J18号住に代表される加曽利 E 2 式後半段階のあとに、当麻遺跡72号住に代表される時期がくる。その土器の組み合わせは前代までと様相を異にし、加曽利 E 式のキャリパー形土器の数が少なくなってしまう。土器の組み合わせは、連弧紋土器、曾利式の斜行沈線紋土器（同じく重弧紋土器）、曾利縄紋系土器、そして私が「胴部分帯型土器」と仮称した土器など、多種多様な要素から成っている。全体としての共通性は、器形と、胴部を括れ部の横走沈線もしくは隆帯で上半と下半に分ける器面構成に求められる。

4. この当麻72号住のような組み合わせは、時間幅をもって存在したと考えるべきである。編年的には、加曽利 E 式で言えばちょうど加曽利 E 2 式から E 3 式への移行していく時期にあたり、曾利式編年で言えば、曾利古 3 式と曾利新 1 式にかかわってくるであろう。

5. 「胴部分帯型土器」に象徴的に示されるが、この時期の最たる特徴は、曾利式、曾利縄紋系、連弧紋土器、加曽利 E 式という、それぞれ個性をもった土器群が、その分布の中間地域である東京・神奈川西部地域で共存し、それぞれの属性を交換しあい、その結果新しい土器の型を生みだし、ヴァリエティに富んだ土器組成を出現させていることである。このような状況は、前代までの、加曽利 E 式の組成の中に曾利式が入り込んで伴出する、という状況とは本質的に違う。加曽利 E 式と曾利式双方を巻込んだ土器型式の再編成の時期、という評価を与えることができる。

6. 当麻遺跡72号住に見られるような東京・神奈川西部的な組み合わせは、曾利式の分布の中心地域である釈迦堂遺跡 SIV区 SB-20にも見られるのであり、曾利式分布圏内に貫入している^{註30)}。曾利式に即して考えても、曾利古 3 式から曾利新 1 式への移行は、土器型式の構造の変化を伴うものであり（I. 紋様帯+II. 紋様帯の重畳という構成の確立）、幾つかの新しい類型が土器組成の中心となるという変革の時期であった。これはやはり東京・神奈川西部地域の状況と別個に進行したものは考えられず、西関東から曾利式分布圏まで、大きな地域の中で土器型式の編成替えが起こっていたと考えるべきである。さらに言えば、このような時期、その地域の内部で土器に関する情報が頻繁に流れ、それらを統合して新しい何かを作ろうとする試みと努力が行われていたと考え

られるのである。

5-4 加曾利 E3 式・E4 式

当麻72号住に代表される時期を、土器型式の編成が変わった時期であったと評価したが、その後の東京西部・神奈川西部地域の土器型式の在り方を瞥見しておきたい。

一言で言えば、前段階のようなヴァリエティに富んだ土器組成に代わって、斉一性の強い土器群となる。それは、加曾利 E3 式のキャリパー形土器の器形・紋様帯構成・紋様の区画方法が、多くの土器に共通するようになるからである。ただしこの地域では、その紋様区画の中に曾利式由来の条線地紋が充填される場合が多い。中には、区画の中の紋様を縄紋にすれば加曾利 E 式、条線にすれば曾利式と呼ぶことになるような、「折衷様式」と俗称される土器も多い。神奈川考古シンポジウムでもこの土器に関する討論があった^{註 31)}。一方で、明らかに曾利式の系譜の肥厚帯口縁が扁平化したもの、また曾利式の口縁部紋様帯が省略されて横走沈線 1 本になっている土器もある。

当麻遺跡では 13, 16, 43, 28・36号住の資料がこの時期にあたる。同様の資料は新戸遺跡でも明らかで、5, 6, 11, 10号住、そして最も資料が充実しているのは 13号住（第27図 1～21）である^{註 32)}。

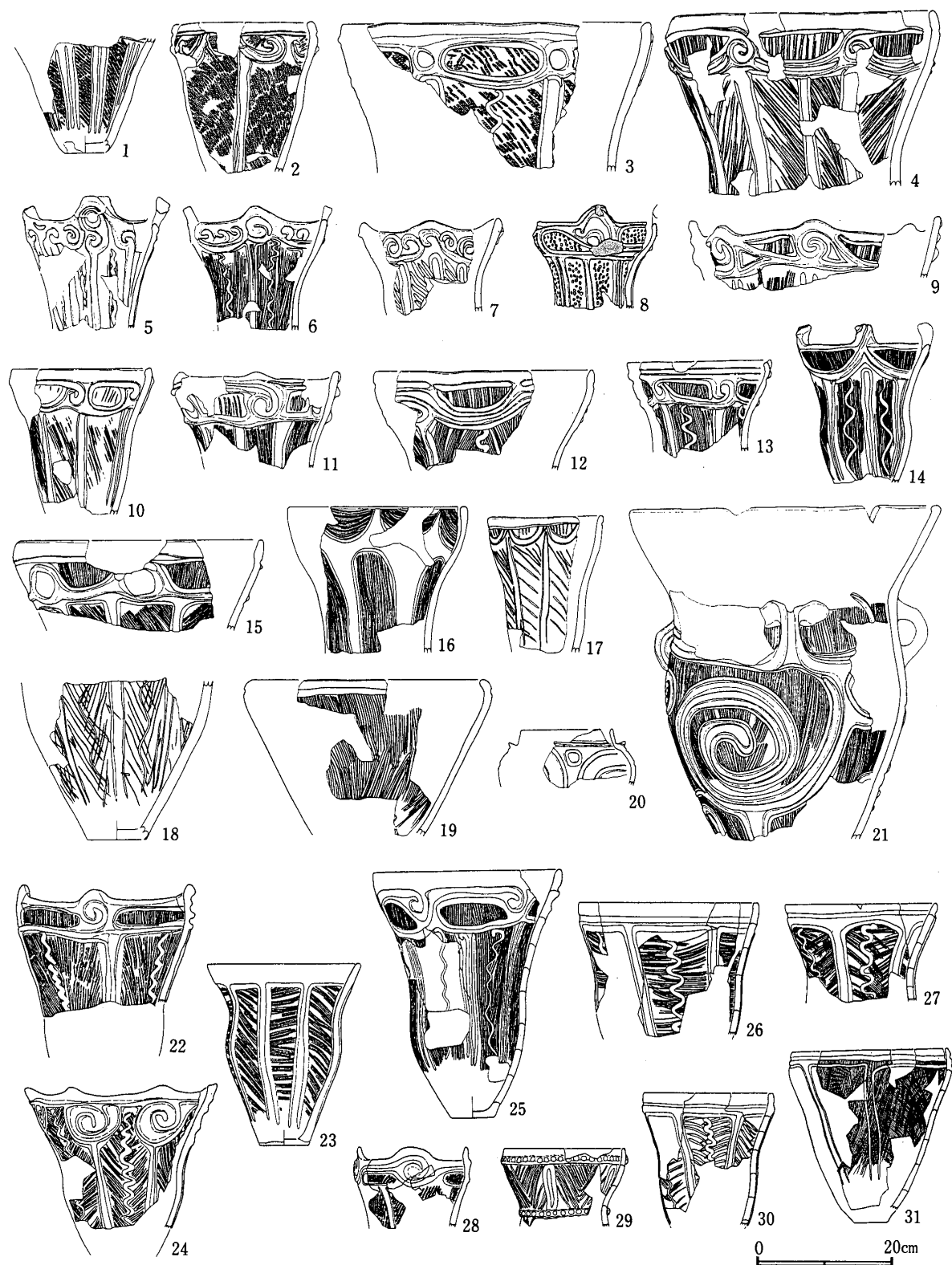
この段階が曾利新 2 式と加曾利 E3 式にあたることは明らかである。いわゆる折衷様式は、加曾利 E3 式の紋様帯構成の中に曾利式の地紋条線を採用したもので、という評価だけでは十分ではない。というのは、曾利新 1 式は加曾利 E 式と同じ構成をもっていたのであり、曾利新 2 式になると胴部に II 状区画が定着する。そのような新 2 式が加曾利 E 式の口縁部紋様をもつならば、加曾利 E 式と全く同じ画面となるからである。つまり、折衷様式はどちらの側からも生じうる。

一方、東京西部・神奈川西部地域のこの時期の土器は、曾利新 2 式とは異なる個性もまた維持している。なぜならばそれらは加曾利 E3 式の I. 紋様帯 + II. 紋様帯という構成をよく保持しているからである。同じ時期、曾利新 2 式の口縁部紋様が沈線 1 本となったり、形態が崩れたりする状況とは異なり、この地域の土器は加曾利 E3 式の口縁部の形態を保っている^{註 33)}。

加曾利 E3 式は、口縁部紋様帯が存在し、胴部に縦の磨消縄紋帯が発達する土器群が卓越する段階と、伝統的な口縁部紋様帯が抜け、胴部上半の大振りな波状沈線と下半の逆 U 字沈線が組み合わされた磨消縄紋に、しばしば蕨手状紋が入る土器群が安定して存在する段階と、二段階に分けて考えられてきた（例えば埼玉編年の XIIb 期と XIII 期）。曾利式は、前者に曾利新 2 式、後者に曾利新 3 式が並行するとしてよい。甲府盆地の釈迦堂遺跡では、曾利新 2 式の住居 S III 区 SB05 に前者の加曾利 E3 式が入っており（第15図 5～10）、曾利新 3 式の S IV 区 SB01, SB78 に後者の加曾利 E3 式が伴っている（第16図 6～12）。後者の加曾利 E3 式と曾利新 3 式の組み合わせは井戸尻遺跡群の曾利 V 式標式資料、居平 3 号住でも見られた（第 3 図 14～20）。

その後者の時期、東京西部・神奈川西部地域では完全にハの字紋とその系統の列点紋がつく土器が卓越しており、加曾利 E3 式の量を圧倒している。ただし、多摩丘陵を下りて多摩川をわたった武蔵野台地の遺跡では加曾利 E3 式が安定しており、曾利新 3 式系統の紋様がつく土器がそれに伴

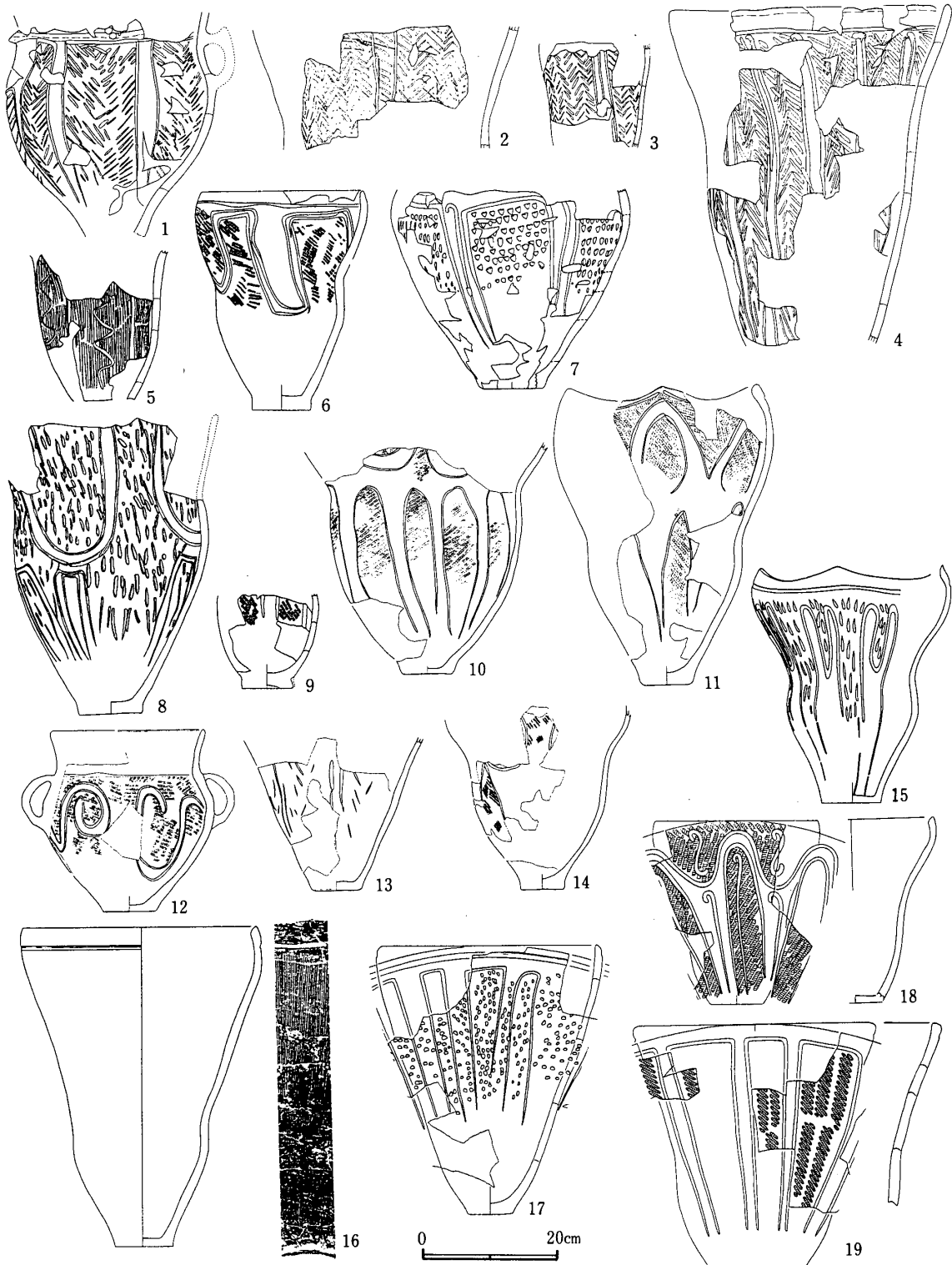
山形 眞理子



第27図 東京・神奈川西部地域の加曾利 E 3 式並びに曾利新 2 式 (1/10)

1~21 新戸 J13号住, 22~24 尾崎32号住 22・23は埋甕, 25~31 尾崎34号住 25は埋甕

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）



第28図 東京・神奈川西部地域の加曾利 E3・E4 式並びに曾利新3式とその後（1/10）

1～4 橋本 SI46 1は埋甕, 5～7 当麻1号敷石住居址 5・6は埋甕, 8・9 当麻2号敷石住居址埋甕, 10・11 新戸 J5号敷石住居址埋甕, 12～14 新戸 J2号敷石住居址埋甕, 15 平尾 No9 4号住, 16・17 平尾 No4埋甕, 18・19 平尾 No2

出する、という地域差が見られる^{註34)}。

稲城市平尾遺跡では(可児・安孫子ほか1971)、蕨手状紋の入る加曾利E3式と、口縁部紋様として1本沈線と、胴部Ⅱ状区画の中に列点紋が入る曾利新3式類似の土器、さらには口縁部に1本沈線がめぐり胴部が一面櫛歯条線となる土器が存在している(第28図15~19)。櫛歯条線の土器は中期終末のこの地域にしばしば見られる。この平尾遺跡から2kmほどしか離れていない川崎市仲町遺跡の敷石住居址からは、列点紋も櫛歯条線紋も報告されていない(甲元・岩崎ほか1971)。

橋本遺跡の住居址ではハの字紋の土器が主体であるが(たとえばSI46, 第28図1~4)、加曾利E3式も伴出している。一方、当麻遺跡の敷石住居址から出土するハの字紋系の土器群は、施紋が粗雑になっている。紋様区画についても、曾利新3式には見られなかった二重の沈線による区画や、胴部が上半と下半に分かれるような構成をもつものがある(第28図8)。そういった土器を持った当麻2, 5, 8号敷石住居址は曾利新3式より後代に属するものと考えられる。新戸遺跡の敷石住居址出土土器群は(第28図10~14)、報告者によって加曾利E3式との型式差・地点差が注意され(大上・御堂島・山本ほか1988)、のちに柳澤清一氏によって加曾利E3-4式の良好なまとまりと評価された(柳澤1991b)。これらの組み合わせが当該地域で一段階を画するものと考えられ、それは曾利式の編年にてらして言うならば曾利新3式の直後、金の尾段階に相当しよう。

曾利式分布の本場では、この金の尾段階の遺跡は少なく資料も貧弱である。それに比べれば多摩丘陵と相模川流域では、この時期の遺構は多い。曾利新式のハの字紋崩れの土器についても、むしろこちらの地域の方が良好な資料が多い。そして、施紋が粗雑になるという変化に加え、加曾利E式の区画紋様を取り入れて紋様が変化している点も、よく示されている。つまり、最終末の曾利式は、本来的な分布圏内ではなく、その東の隣接地域である多摩丘陵西部から境川・相模川流域にかけての遺跡で、比較的良好な命脈を保ったのである。

その次に、加曾利E4式がほぼ単純に出土する段階があり、さらに称名寺Ia式と共伴する時期へと変遷するものと思われる。多摩丘陵地域では、八王子市船田遺跡B地区15, 16号住(城近ほか1969)が加曾利E4式の住居であり、ハの字紋崩れの破片はごく少量報告されているにすぎない。武蔵野台地の方が報告例が多く、小金井市前原遺跡4号住(小田・伊藤ほか1977)、同中山谷遺跡25住(伊藤・中山ほか1987)、国立市谷保東方遺跡2号住(渡辺ほか1978)などから加曾利E4式が単純に出土しており、国分寺市南養寺遺跡26号住では加曾利E4式でも最終末の土器と称名寺Ia式が共伴している(馬橋ほか1990)。

5-5 小結

東京西部・神奈川西部地域において、加曾利E式編年と曾利式編年の関係について論じてきた。その結果、次のような編年の相互対比を行うことが可能であると考えた。

曾利古1式	加曾利E1式
曾利古2式	加曾利E1式<宇津木台遺跡D地区59号住の時期>

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）

曾利古2式	加曾利E2式<当麻遺跡18号住の時期>	
曾利古3式	加曾利E2式<川尻遺跡J18号住の時期>	連弧紋土器の出現
曾利新1式	加曾利E2-3式<当麻遺跡72号住の時期>	連弧紋土器の盛行
曾利新2式	加曾利E3式<新戸遺跡13号住の時期>	連弧紋土器の衰退
曾利新3式	加曾利E3式	
(金の尾土壇)	加曾利E4式	曾利式系紋様をもつ土器の最終段階
(一の沢1号住)	加曾利E4式	

<>内に、私が型式内細分段階をわかりやすく示すために、文中でしばしば言及した代表的な遺構の名を挙げておいた。また、さらにその右に若干の備考を付した。

この中で、仮に、加曾利E2-3式という柳澤氏が提唱している型式名称を使っている。私が注目した当麻72号住の時期は、すでに論じた通り加曾利E式の2式から3式に移行するまさにその時期であり、加曾利E2-3式という名称がよく合うと考えたからである^{註35)}。厳密には、連弧紋土器と、数は少ないものの連弧紋に伴出するいわゆるキャリパー形深鉢を、加曾利E2-3式に包括することが妥当である。しかしこの時期に、加曾利E式とも曾利式とも言い難いような土器が一定量存在していることは既に述べた通りである。

この編年対比表で表わしきれない点を付け加えておきたい。当麻72号住のような土器群の在り方は、曾利式で言えばちょうど曾利古式から曾利新式への過渡期に見られる。上では曾利古3式に川尻J18号住の加曾利E2式を、そして加曾利E2-3式を曾利新1式に対比させている。ただし実際には、当麻72号住のようにヴァリエティに富む組み合わせは、曾利古3式の、曾利式の斜行沈線紋土器と曾利縄紋系土器が組成の中心になる時期には、始まっていたと考えている。つまり、西関東の加曾利E2-3式の成立より若干遅れて、曾利新式が成立したのではないかと考えている。

6. 曾利式土器と「唐草紋系土器」の関係

6-1 目的と方針

この章では、曾利式と、その西隣に分布していた「唐草紋系土器（唐草紋土器）」との編年対比を試みることにより、両者の関係を探っていくこととする。

長野県の中・南信地方に分布する中期後半の土器群に関しては、土器型式名がつけられないまま、この通称がすっかり定着してしまった。ただし、中期後半の初頭の土器群については、岡谷市梨久保遺跡の報告で提唱された「梨久保B式」がある（宮坂ほか1972）。『長野県史』によれば、「松本平・木曾・諏訪湖盆・上伊那地域ではI期（『長野県史』では中期後葉の土器をI期～IV期に分けている—筆者註）の梨久保B式土器の施文順序を引きついだ土器群が、樽形という器形と唐草文・腕骨文という文様を急速に発達させて地域色を顕著に示し始める。いわゆる唐草文系土器群がこれにあたる」（寺内・野村1986）。

この章の目的は、曾利式と「唐草紋系土器」の編年を対比させ、それに加曾利E式編年を組み合わせて、三者の間に時間軸を設定したいということである。その上で、三者の影響関係の実態を明らかにし、その意味を考えてみたい。

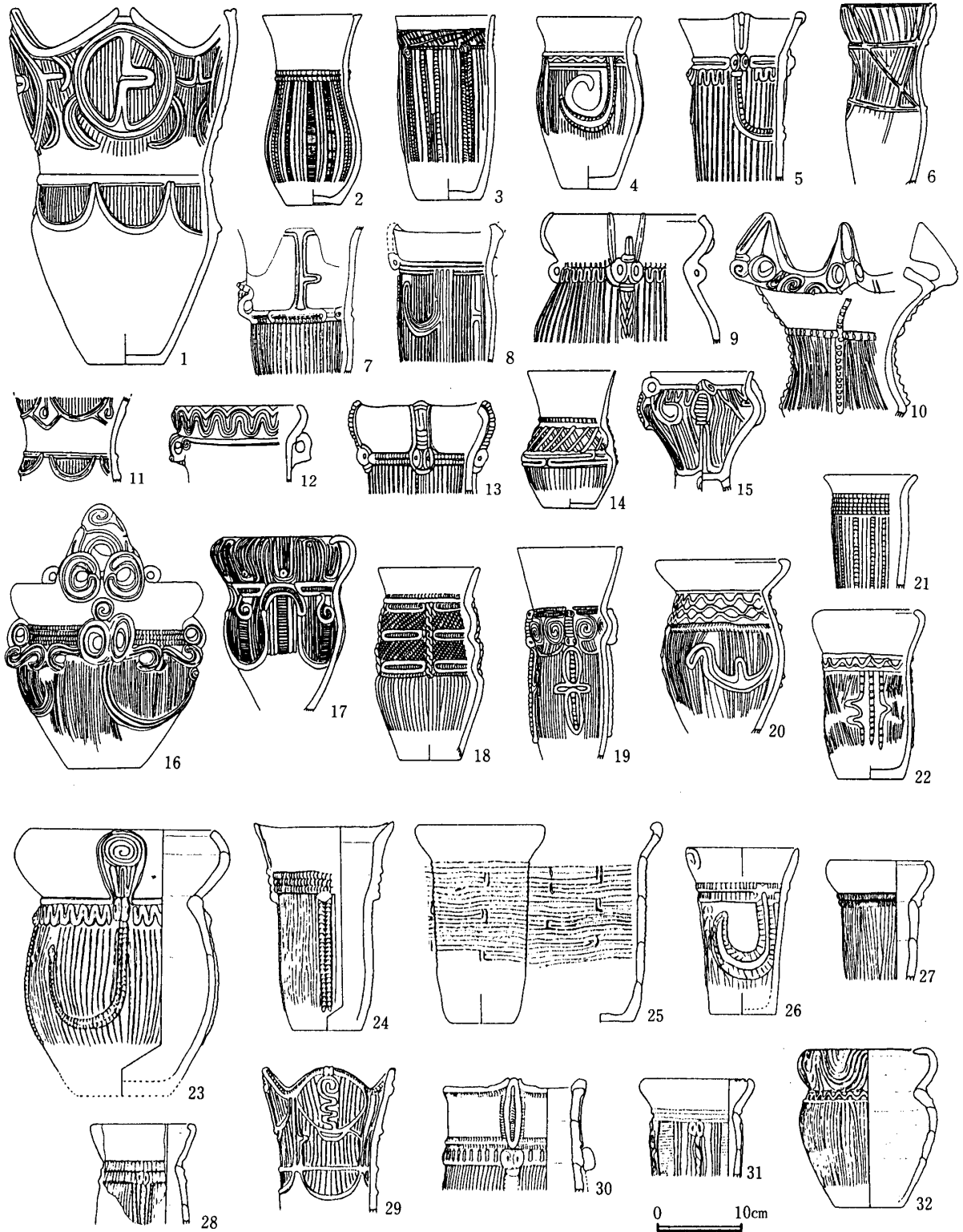
まず、曾利式と関わる点に注意を払いながら、「唐草紋系土器」研究の歴史を概観しておきたい。「唐草紋系土器」は、曾利式よりもさらに実質的な編年研究のスタートが遅れている^{註36)}。

曾利式土器との関係に注目する筆者の観点からすれば、米田明訓氏が評価した通り(1980)、宮坂光昭氏による1972年の「梨久保B式」の提唱が重要である。諏訪湖畔岡谷市の梨久保遺跡の第三・四次調査報告の中で、その3・4号住居址出土の土器群が中期後半の初めに位置する標的な資料と認識された(第30図1~23)。重複する二つの住居址の炉の間に集中して折り重なるように出土した土器群を、報告者の宮坂氏は2群7類にわけ、そのうちの一部(I類B・第30図4~11, II類A・12)を最も特徴的なものとして、諏訪湖周辺における縄文中期土器編年において、ハヶ岳山麓の曾利I式に比定される(対比される)資料として発掘地点名をとって梨久保B式としたのである。しかし米田氏が指摘したように、宮坂氏の梨久保B式は限定しすぎており、3・4号住居址出土土器群が含んでいる若干の異質な資料、たとえば加曾利E1式口縁部(22)、曾利式と認定されるもの(20)、そして時期が若干新しくなるもの(図示せず)を除いた残りをすべて梨久保B式として良いであろう。米田論文、そして1979年の『中部高地縄文土器集成』以来、この梨久保B式は「唐草紋系土器」の最初の段階を画すものという評価が定着した。

「唐草紋系土器」の包括的な編年研究を最初におこなったのは、その『中部集成』であった。この中の「諏訪湖盆・松本平・千曲川水系の部」で、土着の「唐草紋系土器」を曾利式と加曾利E式から明確に分離することが唱われ、その編年試案が示されたのである。また、米田明訓氏も独自に編年研究を進め、その成果が翌1980年に発表された。米田論文は中部集成よりもさらに広い範囲を対象とし、諏訪・上伊那と下伊那の区別をした上で対比研究を行なった労作である。中部集成編年が4段階(唐草文系I・II・III・IV)に対し、米田編年が5段階(唐草文土器第I段階~第V段階)である。この両者の違いは、幾つかの土器類型出現に関する見方の違いに由来している。

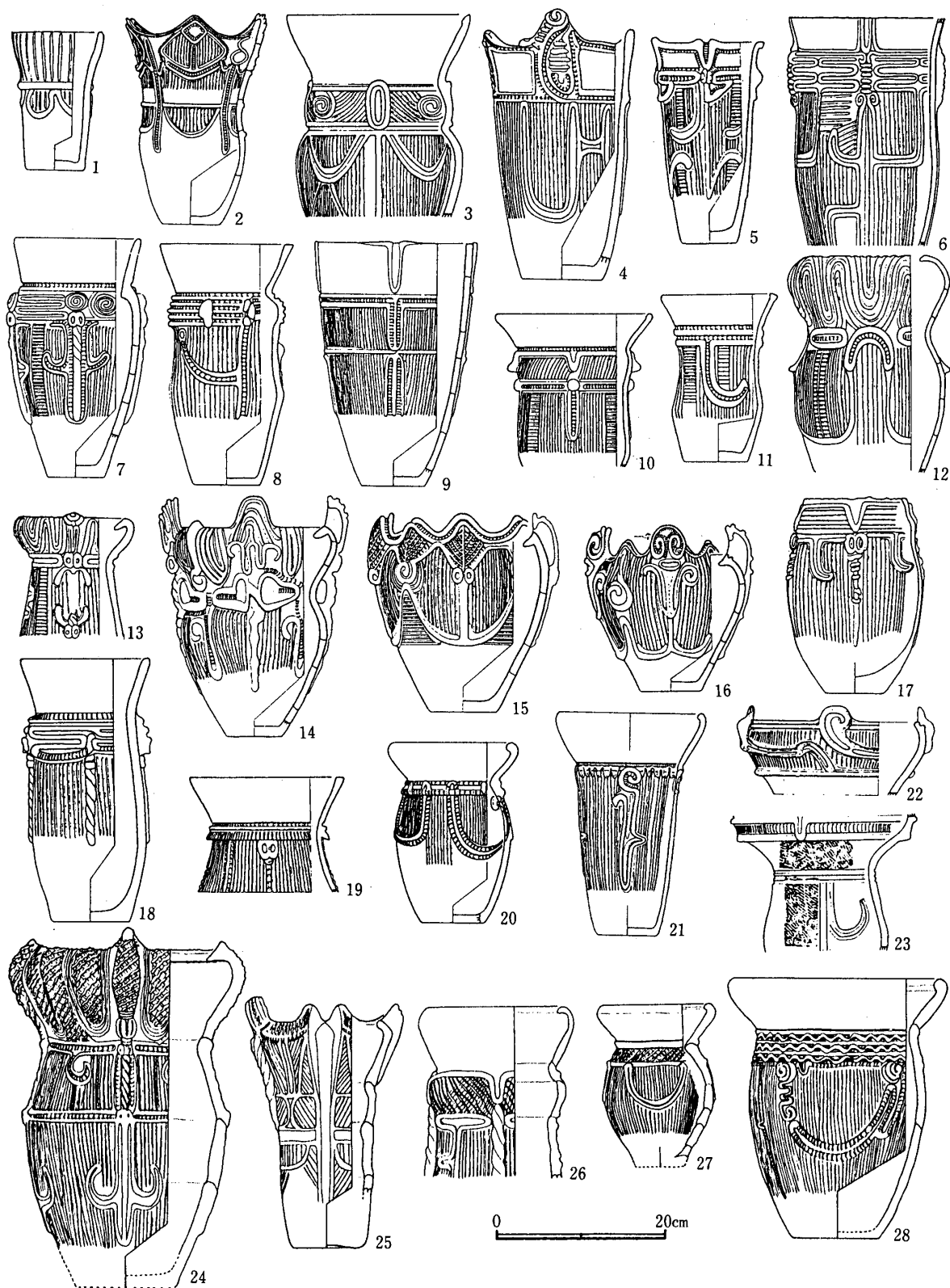
『中部集成』の唐草文系I、米田氏の唐草文土器第I段階はいずれも梨久保B式があてられている。『中部集成』の唐草文系II、米田編年の唐草文土器第II段階が問題で、『中部集成』ではこの段階から無頸・胴張りの大型の甕型土器(以下この論稿において、樽形土器と呼ぶ)が出現するとしている。米田氏はこれを唐草文土器第III段階から、とする。この樽形土器こそは「唐草紋系土器」を代表するものであり、その胴部に展開するおおぶりの渦巻き紋(唐草紋)が「唐草紋系土器」という通称の由来となったのである。一方、米田氏は樽形土器出現よりも一段階前に、つまり氏の唐草文土器第II段階に、H字状懸垂紋(腕の骨の形のようにみえるので腕骨紋とも言われる)と、地紋としての綾杉状沈線紋を持つ土器(例:第31図11・14・15)が成立していると考え。『中部集成』ではこのH字状懸垂紋と綾杉状紋、そして樽形土器との間に時間差を設定しなかったことになる。梨久保遺跡や原村居沢尾根遺跡での在り方を考えれば、現時点では米田編年の方が

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）



第29図 諏訪湖盆・八ヶ岳西麓地域の曾利古1式並行期の土器群（1／8）

1～15 荒神山98号住, 16～22 荒神山99号住（梨久保B式段階）, 23～32 茅野和田西1号住



第30図 梨久保 B 式並びに伴出する曾利古 2 式・加曾利 E 1 式 (1 / 8)

1 ~ 23 梨久保 3・4 号住, 24 ~ 28 茅野和田西 15 号住

妥当であることがわかっている。

両者とも曾利式編年と対比した表を付しているが、米田氏の第Ⅰ～第Ⅴ段階はそのまま曾利Ⅰ～Ⅴ式に、『中部集成』の唐草文系Ⅰ～Ⅳは、Ⅰ・Ⅱは各々曾利Ⅰ・Ⅱ式に、唐草文系Ⅲが曾利Ⅲ・Ⅳ式に、唐草文系Ⅳが曾利Ⅴ式に対比されている。なお、『長野県史』では、中期後葉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期という区分を用いており、『中部集成』の内容を踏襲している（寺内・野村1986）。

「唐草紋系土器」群の中で最も顕著に型式の特徴を具現し、量的にも安定して見られる樽形土器ではあるが（第32図参照）、どのような背景から成立したものか、厳密に追及されたことはないようだ。しかしその変遷、すなわち退化の様子は明瞭にとらえられる。最終的には器形の張りが失われ、口頸部に存在してきた横長楕円区画が失われ、胴部の渦巻紋も失われ4単位の縦長の区画（Ⅱ状区画）だけとなり、その胴部紋様帯がせり上がって、結果として曾利Ⅴ式の構成と似通ってしまう（たとえば第33図20～22）。しかしこれが唐草紋系の樽形土器の「なれの果て」であることは、胴部のⅡ状区画の上端に半環状の刺突紋（勾玉状紋とも呼ばれる）がめぐること示される（第33図20）。この紋様の系譜は「唐草紋系土器」の中でずっと追えるのである。これらの土器を、『中部集成』では最終的な段階である唐草文系Ⅳ（つまり曾利Ⅴ式並行）、米田編年は最後の第Ⅴ段階より一つ前の第Ⅳ段階（つまり曾利Ⅳ式並行）に位置付ける。

梨久保遺跡については、1986年に第5～11次発掘調査の成果をまとめた報告書が出された（会田・唐木ほか1986）。唐木孝雄氏は、H字状懸垂紋と綾杉状紋を持ち、樽形土器を持たない55号住と、樽形土器が入っている25号住の切合い関係を根拠に、米田編年を支持した。ただし米田氏の第Ⅳ・第Ⅴ段階を併せて、梨久保中期後葉Ⅰ～Ⅳに編成している。なお、唐木氏は次のような重要な発言を行なっている。「これらこの地域に分布する土器群は唐草文系土器、あるいは唐草文土器と呼ばれている。これはⅢ期に登場する隆線渦巻紋土器（樽形土器—筆者註）が、量が多く普遍的に見られることによる。しかし、Ⅱ期からⅣ期まで通して採用され、梨久保B式にその初源をたどることのできる地紋の綾杉状沈線紋にこそこの土器群の特徴が認められる。したがって、梨久保BⅠ～Ⅳ式（Ⅲ式が細分されればⅠ～Ⅴ式）とする方が妥当ではないだろうか。」^{註37)}

「唐草紋系土器」の紋様や器形の要素の幾つかに注目して、それを系統論的に理解しようとした三上徹也氏の論文がある（1986b）。三上氏は唐草文系土器が梨久保B式の伝統をスムーズに受け継ぐものであることを述べたが、根拠とした曾利Ⅰ式と梨久保B式の施紋順序の違いについては事実の誤認がある。また、模式的に曾利Ⅱ式の「縄文地文」に対して唐草文土器の「条線地文」を対比させ、条線文こそ唐草文土器使用の人々の集団表徴堅持の発露と意味づけたのも、表層的な解釈という感が否めない。三上氏は1988年、『縄文土器大観』の「唐草文系土器様式」の解説を担当するが、そこでの編年は3段階区分にとどまっている。

松本市の南西、山形村殿村遺跡の報告における百瀬忠幸氏の論考は、「唐草紋系土器」の変化の流れをよく明らかにしている（青沼・百瀬ほか1987）^{註38)}。その中で、樽形土器の成立期から終末期までを型式学的に説明しようとしているが、これは重要な視点である。今後の「唐草紋系土器」研

究は、遺跡や遺構での組合わせを綿密に見ていくと共に、より厳密な型式学的議論に進まなければならないだろう。その上で、加曾利 E 式や曾利式と組み合った形で編年を行なうことができれば、きちっとした骨組みを作ることができるのではないか。

そのような課題に応える準備ができていないが、私ができることは、一つの成案を得た曾利式編年と対比する形で「唐草紋系土器」編年について考え、従来の研究に新たな視点を付け加えることであろう。それは曾利式と「唐草紋系土器」の関係をより細かく見ていくことでもある。

私が主な議論の対象とする地域は、曾利式の主体的分布圏の西端・井戸尻遺跡群のすぐ西、長野県諏訪郡原村から茅野市にかけての八ヶ岳西麓地域、諏訪市・岡谷市などの諏訪湖盆地、岡谷の西北で塩尻峠を越えて入る松本盆地の塩尻市・松本市周辺である。さらに、諏訪湖から南流する天竜川に沿った上伊那地方も念頭に置く。これらの地域は「唐草紋系土器」分布の核地域であると共に、時期によって多寡はあるものの曾利式土器・加曾利 E 式土器を伴出する（第19図地図 A、第20地図 C、第21図地図 B 参照）。

6-2 曾利古式並行期

梨久保 B 式設定の基本資料となった梨久保 3・4 号住の土器群を見渡すと（第30図 1～23）、全体に曾利式初頭の土器と似てはいるが、幾つかの点で曾利式とは別の個性を持っている。顕著な違いの一つとして、曾利式土器では隆帯上を刻む手法が好まれているが、梨久保 B 式にはほとんど見られず、かわりに隆帯脇を押引いたり、隆帯上に横に短い粘土紐をかぶせて連粒状に見せたり、隆帯をねじったり三つ編み状にしたりと、細かい手法をとっている。他に相違点をあげると、

楕形紋のつく土器類型（戸田哲也氏のいう中野山越 A 2 類） 第30図 2

波状縁をもつ小型の樽形土器 14～16

胴部下半が屈折する器形 8・11

胴部紋様の下端部を隆帯で区切るような手法 16

縦だけでなく、横、斜め方向にも施紋される胴部の条線（集合沈線） 5・6・10・11など

このような要素は曾利式には見られない。

梨久保 B 式は曾利古 1 式に並行するのか古 2 式に並行するのか。言い換えれば、中期後半の最初頭の土器であるのか一段階経た後の土器群であるのか。最近の戸田哲也氏の論稿によれば、井戸尻Ⅲ式と梨久保 B 式との間に「中野山越 A 2 類土器期」と仮称する段階があり、しかも松本、塩尻・諏訪、伊那地方の各々に小地域差がある（戸田1995）。

ここでは、戸田氏による諏訪市荒神山遺跡（岡田ほか1975）に則った考え方、すなわち

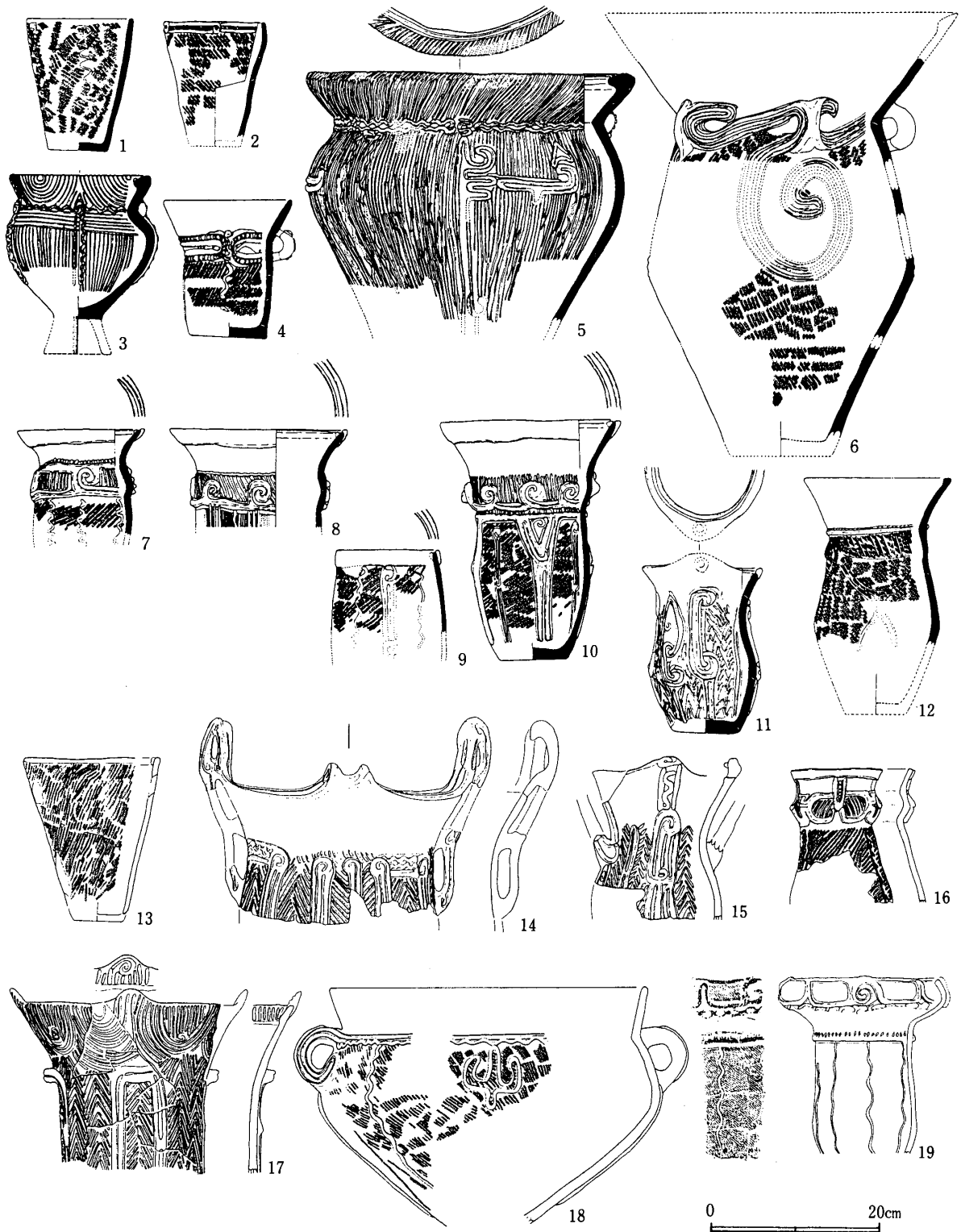
荒神山99号住（第29図16～22）…梨久保 B 式

↑

荒神山98号住（第29図 1～15）…中野山越 A 2 類段階

↑（重複）

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）



第31図 「唐草紋系土器」曾利古3式並行期の土器群（1／8）

1～10 居沢尾根6号住, 11・12 居沢尾根15号住, 13～19 梨久保55号住

山形 真理子

荒神山102号住…井戸尻Ⅲ式

という変遷観を支持し、私もまた梨久保B式の前に、荒神山98号住に示される様な、井戸尻Ⅲ式との間をつなぐ一段階を考えたい。それを曾利古1式並行、次の梨久保B式を曾利古2式並行と考えておきたい。

ハヶ岳西麓の茅野市の遺跡では、諏訪湖盆より曾利式土器の量が多い。茅野和田遺跡（宮坂ほか1970）では、茅野和田西1号住の土器群（第29図23～32）が曾利古1式、同15号住（第30図24～28）が曾利古2式と認定される。1号住には荒神山98号住類似の土器があり、15号住に梨久保B式が入っている。よって上の編年観と矛盾しない。15号住の口縁部に斜格子目状紋（籠目紋）のつく土器は（第30図24）、施紋手法から梨久保B式の一部としてよい。大変手の込んだ作りのもので、類例は茅野市棚畑遺跡41号住にあり、やはり曾利古2式と共伴している（守矢・鶴飼ほか1990）。

次に、「唐草紋系土器」分布の東端に位置する原村居沢尾根遺跡について注目したい（青沼ほか1981）。この遺跡はハヶ岳西麓にあり、曾利式と「唐草紋系土器」の分布の中間地帯にある。曾利式設定の故地である井戸尻遺跡群からは、西北へ12kmほどしか離れていない。ただし井戸尻が釜無川・富士川水系の最上流部に位置したのに対し、原村は天竜川水系の東端である。井戸尻遺跡群では曾利式土器の量が「唐草紋系土器」を圧倒していたのに対し、居沢尾根遺跡ではほぼ拮抗している状況が見られる^{註39)}。

この遺跡がとりわけ重要であると考えられるのは、その存続期間が限られていることによる。遺跡の開始期は井戸尻式であり、曾利古3式で途切れる遺跡である（表1参照）。このような遺跡において、どのような「唐草紋系土器」が出土している（いない）か、という見方は、唐草紋系の編年研究に対し有効なキーポイントを与えるはずである。それは曾利式、唐草紋系と加曾利E式三者の関係を考える上でも同様である。

居沢尾根遺跡の曾利式土器のうち、曾利古3式土器群に伴う「唐草紋系土器」を抽出するならば、それはこの遺跡の唐草紋系の中で、比較的新しいものとなるはずである。曾利古3式と言えば、隣接する富士見町に当該期の単純な遺跡である坂上・向原遺跡があった。両遺跡の曾利古3式の組み合わせを念頭に（第22図）、居沢尾根で類例を求めると、6号住居址の炉直上から典型的な斜行沈線紋土器が出土している（第31図5）。6号住からは他に、曾利縄紋系類似土器（器形が括れていない）、重弧紋がつく台付土器、X把手付大型深鉢の破片があり、曾利古3式の組み合わせとしてよい（第31図1～6）。同じ住居址からは、

口縁部；外反無紋、上端が外に折り返された様な形態の口縁をもつ（複合口縁と呼ぶ）

頸部；ややふくらむ、そこに隆帯による渦巻紋がめぐり、間を沈線で埋めている

胴部；隆帯、沈線による垂下紋、三本沈線による腕骨状のモチーフや蛇行沈線、

地紋は縄紋と縦の条線がある

という顕著な特徴を有する3個の土器が出ており、器形は違うがもう1個体もそのヴァリエーションと捉えられる（第31図7～10）。この伴出状況は、居沢尾根の6号住タイプの土器（7～10）が、

曾利古3式並行の「唐草紋系土器」であることを予測させるものである。

さて、隆帯と沈線を組み合わせて作る腕骨紋と、その間を埋める綾杉状紋を持つ土器は、「唐草紋系土器」の中でも明確な一群として注目されてきたものであるが、居沢尾根には15号住に1個体だけ存在している（第31図11）。一方で、この遺跡からまったく無頸の樽形土器が報告されていないことに注意しなければならない。

ひるがえって井戸尻遺跡群の坂上・向原遺跡の組み合わせを想起すれば、曾利式に若干量伴った唐草紋系の土器は、まさしく上で見た居沢尾根の資料と同質のものである（第22図参照）。この坂上・向原遺跡でも樽形土器はやはり出土しなかったようである。

さらに、居沢尾根遺跡の中の異系統（関東系）の土器として、連弧紋土器（9住）、加曾利E1式（7号住）、加曾利E2式（22住）が存在することも重要である。

以上に述べてきたことをまとめると、

梨久保98号住……曾利古1式

梨久保B式……曾利古2式

居沢尾根6号住……曾利古3式

という対比関係が想定される。

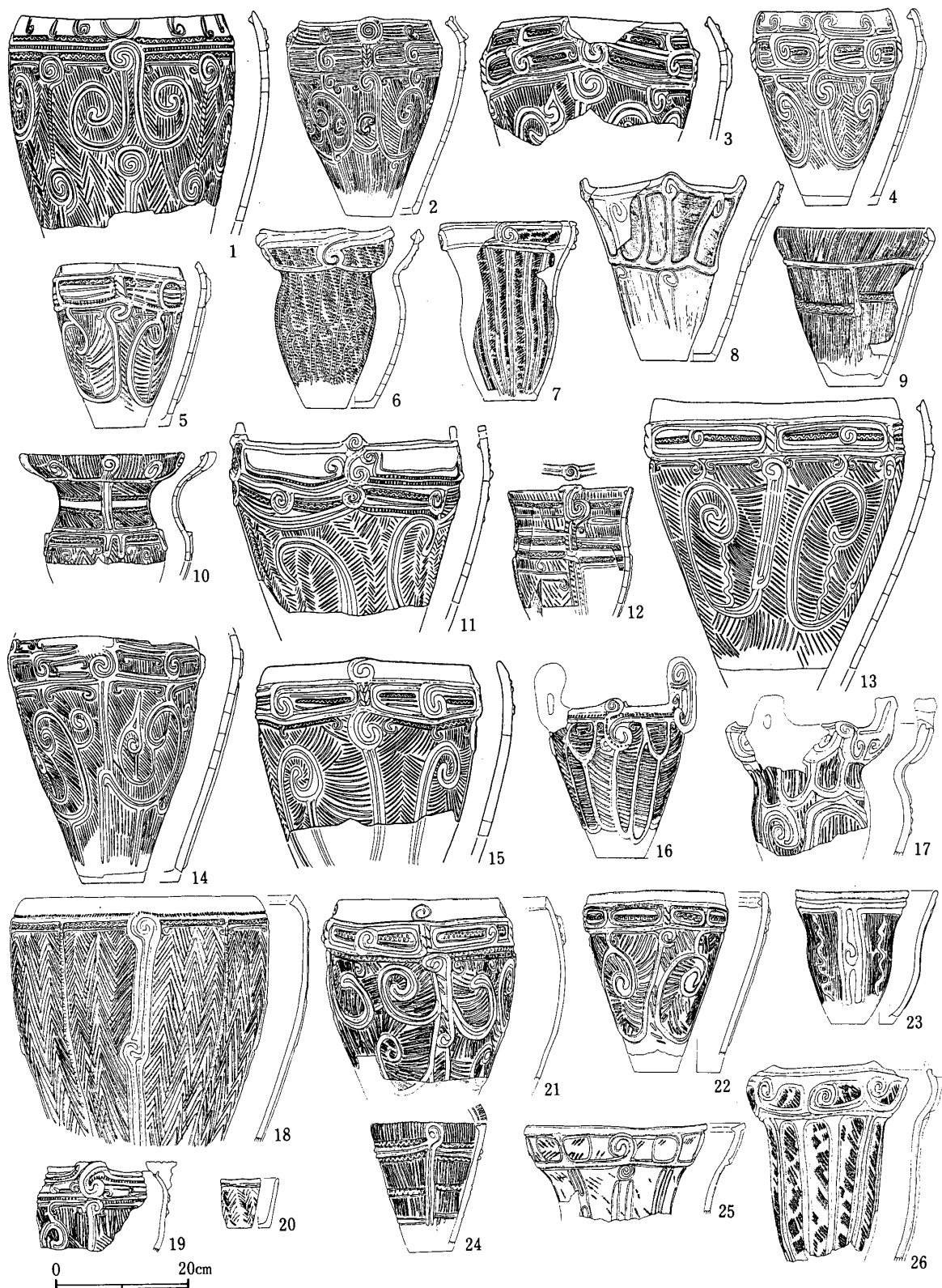
6-3 曾利新式並行期

梨久保遺跡の25号住・55号住は切合い関係にあり、25号住の方が新しい。この両住居に入る土器が全く違っている。55号住（第31図13～19）には居沢尾根6号住類似の土器（16）と腕骨紋・綾杉状紋の土器（14・15・17）があり、曾利古3式と認定される縄紋地紋の両耳把手付鉢（18）、加曾利E式に近い曾利縄紋系（19）がある。これは曾利古3式平行の土器群としてよい。25号住（第32図16～26）は三型式からなり、まず、曾利式は肥厚帯口縁と胴部大柄渦巻紋をもつ曾利新1式（17）、加曾利E式は胴部に磨消縄紋が入る加曾利E3式（26）、「唐草紋系土器」は、大型・小型の無頸樽形土器（18・21・22）・小型のバケツ形土器（24）が入っている。

同様に曾利新1式の肥厚帯口縁が見られる松本市上木戸遺跡105住には（唐木・大竹・寺内ほか1988）、やはり中型・小型の無頸樽形土器がある。こういった事例が単純な一時期のまとまりを示しているか否かは検討が必要であるが、無頸樽形土器が曾利新1式並行の段階に「唐草紋系土器」の主要な類型としてすっかり普及していると考えerことは妥当である。

樽形土器は、口縁部の短い無紋部の下に、渦巻紋を中心に抱くような横長の楕円区画横帯がめぐり（例：第32図13の頸部）、その下の胴部に唐草紋と言われる渦巻紋が入る。この紋様帯の重なりは、I. 口頸部紋様帯＋II. 体部紋様帯という、曾利新式の構成と同じであると言える。「唐草紋系土器」もまた、この時期に東の加曾利E式の構成の影響を受けていたことが考えられる。

曾利式を出土していないが、樽形土器を中心にした組み合わせの「唐草紋系土器」群を出土した遺構として、山形村殿村遺跡2号住（この住居の樽形土器は報告者によって古相を示すものとされ



第32図 「唐草紋系土器」曾利新1式並行期の土器群 (1/10)

1~8 殿村22号住 1・2・3は埋甕, 9・10・11 殿村2号住 9は埋甕, 12~15 殿村5号住
 12・13 炉敷 14・15は埋甕, 16~26 梨久保25号住 18は埋甕, 19・20は埋甕内

た、第32図9～11), 同5号住(12～15), 同22号住(1～8)がある^{註40)}。22号住は出入り口部3個体の埋甕がいずれも樽形土器である。なお、この住居には加曾利E式があり、在地化した特徴を持つが、胴部磨消縄紋が発達していない(6・7)。よって加曾利E2式から3式くらいの、微妙な位置付けの土器である。同じように、3個体の埋甕がいずれも樽形土器であったと考えられるのが上木戸34号住で、この住居からでてくる加曾利E式も胴部の磨消縄紋帯は細く、未発達である。

この樽形土器の型式変化(退化)の過程が捉えやすいことは従来から言われてきた。松本市坪ノ内遺跡(新谷ほか1990)には、この間の変化がよく表われている。口頸部の楕円区画横帯の区画がはずれ(19号住, 第33図11), 縮小し, 消滅していく(18号住, 第33図20・21)。同時に, 胴部渦巻紋を失って縦の隆帯だけになった胴部紋様帯が細長くせりあがり(19号住埋甕, 15), II状区画化していく(18号住20・21)のである。19号住の覆土の一部は18号住に切られている。19号住からは, 加曾利E3式が出土している。曾利式は出土していない。

坪ノ内18号住(第33図20・21)

↑(重複)

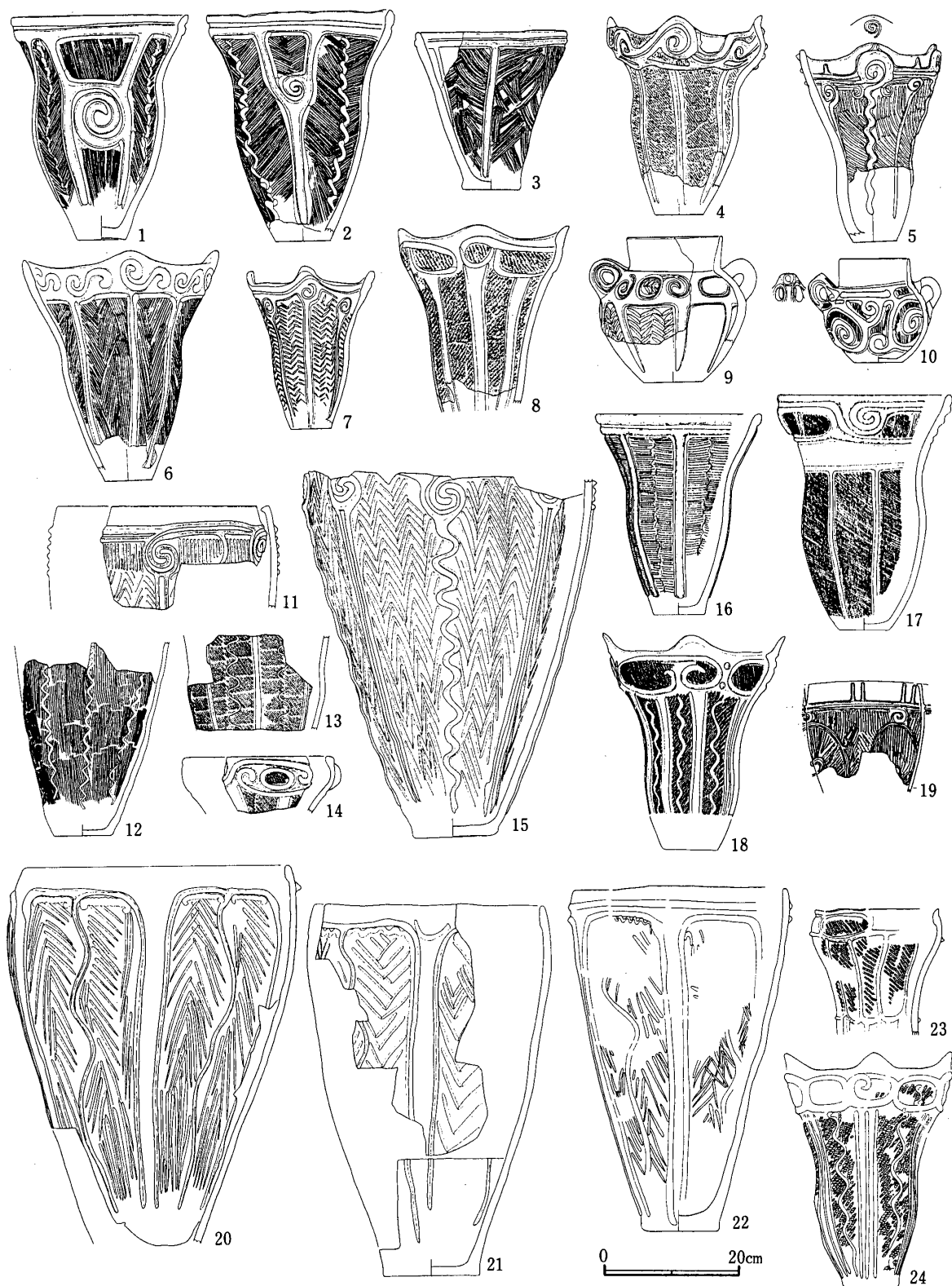
坪ノ内19号住(第33図11～15)

18号住の二個体の土器は, 樽形土器の「なれの果て」の姿である。樽形土器の器形は細長くのび切って, 胴部紋様帯のII状区画のみとなり, その中にやはり前代までの綾杉状沈線がまばらに残される。この樽形土器の最終的な姿が, 曾利式の終末の土器, つまり曾利新3式のハの字紋の土器と, 紋様構成・紋様の両面で似ていることは興味深い。坪ノ内18号住の土器は, 一見すると曾利式終末の土器の地方型のように思われるかもしれないが, 実は前代までは曾利式と似ていなかった樽形土器であったのである。よく言われるように, II状区画の上端に残る「勾玉状紋」は, 樽形土器の胴部紋様帯上端に頻繁につけられたものであり, その出自を何よりも雄弁に語っている。

塩尻市柿沢東遺跡(小林・鳥羽ほか1984)3号住では, 掘込みの深い住居の覆土中から多数の完形・半完形土器が出土したが(ごく一部のみ図示, 第33図16～19), 加曾利E3式が卓越している。実測図の掲載された20個体のうち11個体が加曾利E3式で(ただし埋甕2個体の胴部磨消縄紋は幅がせまく, 若干古い様相を呈す。17), 曾利新2式は3個体(16), 「唐草紋系土器」は4個体にすぎない。唐草紋系は3個体が樽形土器で, 口頸部横帯の抜けた坪ノ内19号住タイプのものである(19)。加曾利E4式は入っていない。この例のように, 樽形土器が形態的に崩れる時期の土器が, 加曾利E3式と並行することは確実である。

曾利式との関係を知るために, より東の遺跡を見る必要がある。茅野市では, 棚畑遺跡57, 58号住の資料が注目される(第33図1～10)。並んで発見された二軒の住居址は, 土器の内容からしてほぼ同時期のものである。ここでは曾利式が圧倒的で, その多くが曾利新2式である。曾利新2式を中心とした短い時期におさまる資料と考えてよい。この曾利式土器群に伴うのが, 加曾利E3式である(第33図8)。やはり, 在地の特徴をもつ加曾利E3式もある(4)。おもしろいことは, これだけ多くの土器の中で, 明らかに「唐草紋系土器」と言えるのは57号住の一個体だけで(5),

山形 眞理子



第33図 「唐草紋系土器」加曾利 E 3 式並行期の土器群 (1 / 10)

1～5 棚畑57号住, 6～10 棚畑58号住, 11～15 坪ノ内19号住 12・15は埋甕, 16～19 柿沢東3号住 17は埋甕, 20・21 坪ノ内18号住 20は炉敷, 22～24 上木戸17号住 22は埋甕

それも曾利式の波状口縁の小型深鉢と器形が同じで、それに坪ノ内19号住段階の樽形土器の紋様がつけられているのである。

曾利新2式の時期になって、茅野市域で「唐草紋系土器」の量が減り、かわりに新2式が卓越することになったのである。ところが、曾利新3式になると、茅野市域には明確な曾利式が少なくなってしまう。加曾利E3式は、松本盆地から八ヶ岳西麓にかけて一定量出土し、しかも在地の要素が加わって変化したものがある。

以上に検討してきた事例をまとめて考えると、

典型的な樽形土器盛行期	加曾利E2-3式	曾利新1式
(坪ノ内19号住)	加曾利E3式	曾利新2式(棚畑57, 58号住)
(坪ノ内18号住)	加曾利E3式	曾利新3式

という並行関係が想定される。

6-4 「唐草紋系土器」の終末について

上で見たように、加曾利E3式は唐草紋系の樽形土器の変化にともなって続いている。それでは、「唐草紋系土器」の終末は加曾利E式のそれとどのように関わるのであろうか。

樽形土器の「なれのはて」と表現した坪ノ内18号住のような「唐草紋系土器」の後にも、その系統の土器は続いている。その点は曾利新3式後の状況と同じである。

塩尻市柿沢東遺跡の加曾利E3式(第33図18)よりも新しい加曾利E式は、松本盆地から諏訪湖盆にかけて散見される。塩尻市小丸山遺跡(原・樋口ほか1970)特殊小竪穴に入れ子状逆位に埋められていた3個体のうち(第34図3~5)、一つは柳澤清一氏がこの地方の加曾利E3-4式と考えたもので(1991a)、器形や胴部上半紋様に在地化の特徴が見られる(5)。別の一個体も同様の器形で、樽形土器の紋様が崩れたものが加曾利E式の縄紋を採用したように見える(3)。どちらにも唐草紋系独特の勾玉状紋がついている。これらは加曾利E3式後に属する資料であろう。

同じく加曾利E3式直後に属するのは、松本市の西方、梓川村荒海渡遺跡E-21区土器集中(土器溜り)である(小林・大久保ほか1988, 第34図1・2)。特殊な器形である両耳付釣手土器(2)の胴部紋様は沈線による逆U字区画の中にまばらな綾杉状紋が施されるもので、坪ノ内18号住の胴部紋様がさらに退化している。共伴したのは環状把手をもっていたらしい加曾利E4式である(1)。松本市南中島遺跡28号住からも同様な組み合わせが出土している(新谷ほか1991)。

ところで小丸山遺跡より1.5kmも離れていない、塩尻市山ノ神遺跡の小竪穴からは、小丸山とは様相を異にする土器数個体が得られている(小林・三村ほか1985, 第34図6~10)。いずれも口縁部が大きく開く器形であり、U字や逆U字の区画の中に、綾杉状紋が粗雑に施されたもの(8)、縄紋がまばらに施されたもの(7)、勾玉状紋が伸び切ったような沈線紋がつくもの(6)がある。微隆帯区画の中にまばらに縄紋を施した破片(10)は、加曾利E4式とすることができる。

松本盆地北部の北村遺跡は、地表下3m以下から300体にのぼる縄紋人骨が発見された遺跡であ

る(平林ほか1993)。報告書によると遺跡の時期は中期末葉(加曾利EⅢ式並行)から後期中葉(加曾利EⅠ式並行)であり、遺跡の最初の時期の次、加曾利EⅣ式から柄鏡型敷石住居が出てくる。この遺跡の「唐草紋系土器」(例:第34図11~13)は、樽形土器の形態がすっかり崩れ、Ⅱ状区画もなく綾杉状紋と勾玉状紋だけになってしまったものもある(12)。山ノ神遺跡で見たような、胴部上半から口縁部が大きく膨らみ、粗雑な綾杉状紋がつく土器がある(11)。

山ノ神や北村のような、形態上も紋様についても崩れ切ったような土器群が、この地方の中期終末の一段階を画したのであろうか。加曾利E4式は、松本盆地の朝日村熊久保遺跡(樋口・横山・小松1964)、松本市殿村遺跡19号住覆土、諏訪湖盆で岡谷市梨久保遺跡の小竪穴・埋甕などに見られる。だが、それらについて共伴する在地の土器を特定することは難しい状況にある。

一方、周知のように、加曾利E3式からE4式の時期にかけて、長野県東信地方すなわち上田・佐久・小諸地方で遺跡の数が豊富である。東信の千曲川流域から北信地域の縄紋中期後半の土器については、綿田弘実氏がまとめている(綿田1988)。それによれば、この地域は常に他地域に中核を置く複数系統の土器型式の分布の縁辺部にあっており、主に4つの系統、すなわち「唐草文系」「加曾利E式系」「越後系」そして土着の「圧痕隆帯文土器」が混在するという、複雑な様相を呈している^{註41)}。4系統の流れは時期によって大きく変わるが、加曾利E3式からE4式にかけて、組成の中心は圧倒的に加曾利E式であることが述べられている。

小県郡真田町四日市遺跡の報告書で、中期最終末には加曾利E式の優位性の前に「唐草文系土器」の存在が危うくなる、と述べられている(宇賀神・百瀬ほか1990)。千曲川水系でもやはり唐草紋系の名残はわずかに胴部に用いられる列点紋くらいになってしまう。このように、東信地域でも、加曾利E4式に確実に共伴する唐草紋系土器系統を把握することは難しい^{註42)}。

山ノ神や北村でみられたようなハの字紋崩れの土器が、唐草紋系土器最終末の姿として加曾利E4式に並行する可能性を念頭に、今少し資料の増加を待つ必要がある。

6-5 小結

松本盆地、諏訪湖盆、茅野市域の遺跡を中心に、曾利式・加曾利E式との関係を鍵としながら、「唐草紋系土器」について概観してきた。現時点で私は、次のような変遷観をもっている。将来的に細分型式とできる可能性をもつ段階について、括弧内に代表的な遺構名称を挙げる。

井戸尻Ⅲ式



(荒神山98号住) 井戸尻Ⅲ式と梨久保B式の間近的な様相を示す土器群



曾利古1式を伴出

梨久保B式 主に曾利古2式、加曾利E1式を伴出



(居沢尾根6号住、梨久保55号住) 梨久保B式の系譜上にある複合口縁の土器に、

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）



第34図 「唐草紋系土器」加曾利 E 4 式並行期の土器群（1 / 8）

1・2 荒海渡 E-21区土器集中, 3~5 小丸山 A-23区小竪穴, 6~8 山ノ神36号小竪穴, 9・10 山ノ神22号小竪穴, 11~13 北村 SB560 13は埋甕

山形 真理子

腕骨紋と綾杉状紋をもつ土器が加わる

↓
無頸樽形土器が安定して土器組成の中心となる時期 (例: 殿村 5, 22, 27号住)

↓
(坪ノ内19号住, 棚畑57, 58号住) 曾利新1式, 加曾利E2-3式を伴出
無頸樽形土器が変化し, 量的にも少なくなる時期

↓
(坪ノ内18号住) 加曾利E3式が安定して存在
無頸樽形土器がさらに変化し, Π状区画の土器となり, 曾利新3式と類似するが, 曾利新3式自体は量が少ない

↓
(荒海渡 E-21区土器集中) 加曾利E3式が安定して存在
Π状区画とハの字紋 (短沈線による綾杉状紋) がさらに崩れて粗雑になる時期

↓
(山ノ神小竪穴) 加曾利E4式を伴出
加曾利E4式と並行

上の変遷段階は, 私の曾利式・加曾利E式編年に沿う形で整理されたものであり, 編年型式として理解できるか否かは別に検証される必要がある。私がここで提示した試案は, 見通しとしての外れなものではないと考える。しかし, 「唐草紋系土器」には複数の類型が有り, その一々の系統性と変遷を考慮にいれ, 厳密に型式学的な議論をして編年を組み立てる必要がある。それは今後の課題として残されている。

7. 結語 — 曾利式, 加曾利E式, 「唐草紋系土器」三者の相互関係とその展開過程 —

前章まで述べてきたことを表にまとめると, 次のようになる。

唐草紋系土器	曾利式	加曾利E式
(荒神山98住)	曾利古1式	加曾利E1式
梨久保B式	曾利古2式	加曾利E1式 (宇津木台 D59住)
梨久保B式	曾利古2式	加曾利E2式 (当麻18住)
(居沢尾根6住, 梨久保55住)	曾利古3式	加曾利E2式 (川尻 J18住)
(殿村5住)	曾利新1式	加曾利E2-3式 (当麻72住)
(坪ノ内19住)	曾利新2式	加曾利E3式
(坪ノ内18住)	曾利新3式	加曾利E3式
(荒海渡 E21区土器集中)	(金の尾土壙)	加曾利E4式
(山ノ神小竪穴)	(一の沢1住)	加曾利E4式

私は編年の問題を軸に議論を進めてきたが、その中で、これら三土器型式の展開の過程が相互に緊密なものであったことを述べるようになった。論点が多岐にわたったため、ここで最後に要点をまとめ、曾利式土器を中心とした中期後半の土器型式の動態について、私の見解を明らかにしたい。

7-1 曾利式と加曾利 E 式の関係について

この両型式の関係について、私が注目するのは次の諸点である。

1. 成立当初の曾利式と加曾利 E 式は、型的には全く異質なものである。甲府盆地で典型的に現われるような曾利古 1 式は、きわめて在地性の強い、つまりは分布の限られたものであり、その点で中期後半初頭の、地域色の強い土器型式が狭い範囲で成立している状況の一つの例という評価ができるであろう^{註 43)}。本格的な型式相互の影響関係が現われるのは、次の曾利古 2 式の時期からである。

2. 曾利縄紋系土器は、井戸尻Ⅲ式から生成した曾利式の「中核的」な土器群とは全く内容を異にするもので、曾利式の伝統の中からは生じ得ない。これはやはり加曾利 E 式との接触の中で曾利式内部に成立した土器群と考えなければならない。その曾利縄紋系土器の祖型は、既に曾利古 2 式—加曾利 E 1 式もしくは E 2 式の段階で存在している。そして曾利古 3 式では曾利式組成の中で量的に安定したのである。

3. 加曾利 E 式の影響は曾利式の「中核的」な土器群に及んだ。それは曾利式の胴部施紋順序の逆転現象にあらわれている。すなわち、曾利式本来の施紋順序は胴部懸垂紋→胴部地紋条線だが、曾利古 2 式の縄紋地紋土器の逆転現象（胴部地紋縄紋→胴部懸垂紋）を経て、曾利古 3 式では胴部地紋条線→胴部懸垂紋という逆転施紋順序が、伝統的な順序と共存するに至った。このように、本来的な曾利式もまた加曾利 E 式の影響を取り入れて変わっていたのである。

4. 曾利新 1 式が I. 紋様帯+II. 紋様帯という構造を普遍的に持つに至ったことについて、曾利式が加曾利 E 式と同じ構造を採用したと評価すべきである。曾利新 1 式の I. 紋様帯のひとつには、加曾利 E 式起源の口縁部紋様が入り入れられている。

5. 加曾利 E 2 式に武蔵野地域を中心に出現したと考えられる連弧紋土器は、加曾利 E 2 式と曾利古 2 式段階の曾利縄紋系（口縁部に沈線弧線紋がついている）の両方の要素が組み合わされて創出された土器群ではないかと思われる。

6. 当麻遺跡 72 号住に代表される時期は、東京西部・神奈川西部地域で最も土器組成のヴァリエティの幅が広い。私は柳澤氏の用語を使用して加曾利 E 2-3 式と呼ぶ。この時期、曾利古 3 式の斜行沈線紋土器、曾利縄紋系土器、連弧紋土器、加曾利 E 式のキャリパー形土器が、それぞれ独自の個性をもって存在する一方で、互いの属性を様々なレベルで交換しあい、「胴部分帯型土器」と仮称したような新しい類型の土器群を生み出した。この時期には、東京西部・神奈川西部地域と曾利式分布圏の双方において、土器型式内容の再編成が進行したと理解している。

7. 前項で見たような特徴的な相互交渉の時代を経て、次の曾利新 2 式—加曾利 E 3 式の段階で

は、曾利式分布圏と東京西部・神奈川西部地域の土器の内容は、かなり似通っている。「折衷様式」と呼ばれた土器群の存在が、その現象を顕著に示している。曾利新3式—加曾利E3式の段階では、両地域でハの字紋が卓越するが、その後にハの字紋が崩れていく過程は、東京西部・神奈川西部地域の方が資料が多く、より明確にとらえられる。曾利新3式後の曾利式系統の土器は、本来的な曾利式分布圏よりも東の地域で、よく命脈を保ったように見える。なお、曾利新3式つまりはハの字紋が卓越する時期から、曾利式分布圏と西部関東全域で遺跡や遺構の数が減る傾向が顕著となる。それは敷石住居址の出現と歩調を併せている。

8. 曾利式のハの字紋系統の土器が、中期最終末まで安定して存在していたとは思われない。これらの地域全体が加曾利E4式に取り込まれた。この時期には遺跡の数は非常に少なくなる。

このように曾利式は、常に東から加曾利E式の影響を受け、加曾利E式の属性を取り入れながら型式変遷をとげていったのである。曾利式の中で加曾利E式の影響が微弱なのは成立当初の曾利古1式くらいのものである。逆に、加曾利E式の型式変遷に曾利式が果たした役割というのは、本質的には小さいものであったと考えている。連弧紋土器については曾利式と加曾利E式の要素の組合せを考えたが、加曾利E式の型式変遷の本筋は、従来の研究が明らかにしてきたように、いわゆるキャリパー形深鉢が表わしている。そのキャリパー形の土器群は、曾利式の属性を部分的に採用することはあっても、そのことが変遷の方向を決めることにはならなかった^{註40}。

ただしこの点について説得的な議論をするためには、関東全域の加曾利E式を対象とした考察が必要となる。今回、私は東京西部・神奈川西部という一部の地域の加曾利E式を扱ったが、この地域は加曾利E式後半には加曾利E式分布の中では本当に周縁地域となり、曾利式分布圏とも加曾利E式分布圏とも言い難い状況になる。このような地域で加曾利E式の本来的な型式変遷の要因について論じることには、限界があるであろう。

7-2 曾利式と「唐草紋系土器」の関係について

1. 同じ井戸尻Ⅲ式から生成した曾利式と「唐草紋系土器」は、その初期において、無紋口縁を主体とし、胴部紋様帯が頸部横帯と胴部の縦方向の紋様帯に分帯されるという構成が同じである。ただし「唐草紋系土器」には初めから曾利式に無い類型が存在するし、器形や紋様など幾つかの属性レベルで曾利式とは一線を画す個性を備えている。

2. 梨久保B式より後、「唐草紋系土器」は曾利式とは全く別個の類型を持ち、独自性を発揮する方向に進む。曾利新1式並行の時期に唐草紋系分布域を席卷する無頸樽形土器がその顕著な例である。ただし樽形土器は、曾利新式と同じくI. + II. 紋様帯という重畳を示しており、ほぼ同じ時期に加曾利E式の紋様帯構成が「唐草紋系土器」にも影響を与えたことがうかがえる。

3. 「唐草紋系土器」の終末段階の土器は、紋様区画（Ⅱ状区画）と紋様自体（綾杉状紋・ハの字紋）の面で曾利式終末段階の土器と類似している。それが加曾利E3式に並行するが、その頃か

ら遺跡の数が減り始める点も、両土器型式分布圏で共通している。曾利式系統のハの字紋崩れの土器が残存したように、「唐草紋系土器」の系統も加曾利 E 3 式後に残存していく。

4. 「唐草紋系土器」の分布の一大中心であった松本盆地、諏訪湖盆地域では、中期最終末すなわち加曾利 E 3 式後の遺跡の減少がはなはだしい。そのような中でも、口縁部が大きく開き、非常に崩れたハの字などの紋様をもつ土器が、加曾利 E 4 式と共伴する状況が考えられる。しかしこの時期にはもう「唐草紋系土器」が型式として確固とした存在であったとは言えないであろう。土器型式としての「唐草紋系土器」は、曾利式の終焉と同じく、加曾利 E 4 式より先に消滅してしまったと考えるべきである。

5. 東信地域の千曲川流域では、松本盆地や諏訪湖盆と関係はあるが、かなり異なった土器の状況が看取される。加曾利 E 式の影響力が強い地域であり、この地域が碓井峠經由で北関東の加曾利 E 式と結び付いていたことがわかる。「唐草紋系土器」分布の中心地域とは異なり、加曾利 E 3 式以降に遺跡が多い。ただし、やはり中期最終末には減っている可能性が高い^{註 45)}。

曾利式と「唐草紋系土器」は、同じ母胎から生成し当初はよく似た構成をもって出発したにもかかわらず、曾利式と加曾利 E 式の関係ほど密接ではないように見受けられる。「唐草紋系土器」自体が曾利式の分布圏で発見されることが少なく、唐草紋系分布域で非常に普及していた樽形土器でさえ、山梨県に入る例は少ない（櫛原1986）。両者は互いの紋様を取り入れることはするが、それが各々の型式変遷に深刻に影響するものであったとは考えられない。曾利新 1 式の肥厚帯口縁と胴部大柄渦巻紋を「唐草紋系土器」起源とする考え方もあるが（『中部集成』、三上1986b、小林・武藤・樋口ほか1988など）、私はそのどちらも北関東の大木 8 b 式に関係していくという説（石坂・藤巻・桜岡1988）に賛成していることは既に述べた。

曾利新 1 式段階の曾利式と唐草紋系の樽形土器は、見た目が全く違うものとなっているが、それが終末に向かって似たような変遷をたどり、土器自体も似てくることは興味深い現象である。そして中期最終末には、どちらも加曾利 E 4 式の進出の前に終焉を迎えたと考えられる。曾利新 3 式並行期から遺跡が少なくなり、その頃から遺跡の在り方（分布）が変わり、敷石住居や配石遺構が一般的となる。そして加曾利 E 4 式の時期になると、遺跡の数の減少はさらに際立ったものとなる。このような文化の凋落現象は、松本盆地から諏訪湖盆、八ヶ岳、甲府盆地、静岡県東部、そして西関東まで、一連の地域で同様に認められる。すなわち、「唐草紋系土器」と曾利式の分布圏は、大局的にみれば、土器の型式変遷を含めた文化の変遷と動態が、同じ方向性をもっていた。

ただし「唐草紋系土器」の型式変遷については、すべての土器類型を考慮に入れた、より厳密な分析と議論が必要であることを再確認しておきたい。

7-3 曾利式土器の歴史的変遷とその意味

簡潔に要約するならば、曾利式の歴史とは、東の加曾利 E 式の要素を次々に取り入れて変化し、

曾利式自体の独自性を薄めていったことであった。最初に全く異なる構造をもって成立した関東の加曾利 E 式と中部の曾利式は、曾利式の方が変化することによって、類似するものとなっていった。最終的には、中部高地で遺跡が急減するのと歩調を併せて、曾利式は加曾利 E 式より早く型式としての終焉を迎え、その後になぜか加曾利 E 4 式が入り込んでいった。

成立当初、加曾利 E 式とは全く異質の器形・紋様構成・紋様を備えていた曾利式が、加曾利 E 式に近いものへと構造的に変化していく過程を見ることは興味深い。曾利式は様々な局面で加曾利 E 式の要素を取り込んだが、中でも最も重要な転機であったのは、曾利縄紋系土器群の生成である。曾利古 2 式の段階で現われた、口縁部渦巻つなぎ弧紋や沈線弧線紋の縄紋土器について、「中核的」曾利式とは全く異なるものであるが、曾利式製作者が加曾利 E 式に類似した土器群を曾利式内部に創出した、という見方が可能である。結局、その曾利縄紋系土器群の伸長に伴って、「中核的」曾利式はごく一部の類型を除いて、曾利古 3 式で途切れてしまう。

この、曾利古 3 式から曾利新 1 式の時期に、東京西部・神奈川西部地域を中心に曾利式分布圏を巻き込んでいる、曾利式と加曾利 E 式のはざ間に幾つかの土器類型が存在し、それらがフレキシブルに交渉し、様々な形の土器を生じさせている状況は、興味深いものである。この状況の中で、連弧紋土器が特徴的に盛行し、曾利縄紋系土器や曾利新 1 式土器と属性を交換し、「胴部分帯型土器」と仮に一括したような土器群を各地にうみだした。そして結果として曾利式は、加曾利 E 式と同じ構造を備えた曾利新式の時代へと移行したのである。

曾利式の型式変遷の本筋にかかわった加曾利 E 式の影響力の重要性に比較すれば、曾利式と「唐草紋系土器」の相互関係は余程表面的なものであったと言わねばならない。一方、「唐草紋系土器」に対して加曾利 E 式が与えた影響は、やはり大きなものがあったと考えられる。この点について厳密に検討することが必要であり、その場合加曾利 E 式の信濃方面への入り口である東信地域の重要性が浮かび上がる。

曾利式と「唐草紋系土器」の分布圏を行きかう交流が、曾利式と加曾利 E 式の間のもので比較して稀薄であったということではなく、曾利式の人々が土器製作に関して、加曾利 E 式土器と共通性を高めることが良いとする価値観を持っていたことを認めるべきであろう。そして、土器のさかんな交渉状況に見られるように、加曾利 E 式と曾利式の社会は、西部関東を通して非常に開放的に結び付いていた。さらに言うならば、山岳地域において中期の文化的繁栄の後、中期終末の崩壊現象が関東平野よりも深刻であったことを考えると、そのような転機に向かって不安を抱え、生活の様式を変える局面にあった曾利式の社会が、より生活の不安が少ないと見られた関東平野の加曾利 E 式社会への傾斜を強めていった、との拡大解釈も可能である。しかしこのような解釈については、多方面からの、また微細な研究が必要であることは言うまでもない。

結局、初期に多くの傑作を生み出していた曾利式土器が、徐々に独自性を弱め、画一的なものとなっていったことは、曾利式を製作していた人々の社会が活力のないものへと変化したことの現われであったと考えているのである。

(1995年11月26日脱稿)

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）

本稿は平成5・6年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。また、平成6年12月に東京大学に提出した博士学位請求論文「曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——」の一部に加筆・修正を加えたものである。

次の皆様には遺跡・遺物見学，文献収集の際に御協力いただいたり，研究会等の場で御指導・御教示をいただいたりするなど，様々な面で御助力をいただいた。

藤本強，今村啓爾，大貫静夫，安斎正人，大塚達朗，田口みどり，上野佳也，青柳正規，赤沢威，千代延恵正，西田泰民，倉林真砂斗，山浦清，前田潮，武井則道，川名広文，岡本東三，柳澤清一，戸田哲也，赤山容造，鷹野光行，関野哲夫，篠原正，小野正文，中山誠二，小林公治，丸山哲也，田代孝，末木健，米田明訓，河西学，古谷健一郎，瀬田正明，芹沢昇，佐野隆，伊藤公明，小宮山隆，奈良泰史，橋口尚武，千葉寛，峰村篤，青沼道文，中山真治，黒尾和久，佐伯（金子）直世，都築（本橋）恵美子，塚本師也，上守秀明，藤原均，新井和之，金子浩之，篠原修二，広瀬昭弘，桜井秀雄，堤隆，竹尾進，丹野雅人，山本孝司，鈴木美保，小泉龍人，伊藤慎二，郡司早直（順不同，敬称略）

また，次の方々には図版作成に御助力いただいた。

佐々木陽子，馬淵広子，山形明子

末筆ながら，ここで心より感謝申し上げたい。

註(下)

- 23) 表1に示されるように、この地域では当麻、新戸、川尻の三遺跡が中期後半のほぼ全般にわたる資料に恵まれている。一方で、それらと近接した位置にある橋本、滑坂、多摩ニュータウンNo300遺跡などはより短い継続期間を示している。これら遺跡間の比較検討が編年研究のためには必要である。
- 24) 加曾利E式土器の細分研究の歴史について述べた文献として、堀越1972、能登1975、戸田1980、宮崎1982、橋口1983、柳澤1985・86bなどがあげられる。
- 25) 藤森栄一氏は、1969年の新版考古学講座の「中部日本」の章で、井戸尻編年の細分型式一覧表を掲載し、南関東の型式との対比もおこなっている。曾利I式に加曾利EI式、曾利II式に加曾利EII式、曾利III式に埼玉の新座J2、3、4号住、曾利IV式に新座J5号住、曾利V式に新座J1号住をあてている。しかし新座のJ2、3、4号住は加曾利E2式と連弧紋、J5号住はそれより古い土器が出土しており、J1号はさまざまな時期の破片である。よってこの藤森氏の対比の真意は不明である。新座遺跡の報告は『井戸尻』と同じ1965年であり、そこで坂詰秀一氏が従来の加曾利E式編年とは関わりない、曾利式編年との対比を重視した加曾利E式編年を行なった。その問題点を柳澤氏が指摘している(柳澤1986b)。
- 26) 他に、羽村町精進バケ遺跡5a号住(森田ほか1990)、国分寺市恋ヶ窪遺跡15号住(広瀬・秋山ほか1982)、小金井市中山谷遺跡4号住(肥留間・土井ほか1971)、調布市入間町城山遺跡(青木・竹崎ほか1981)、埼玉県坂戸市花影遺跡6号住(谷井・今泉1974)などからこの時期の加曾利E式典型例が出土している。
- 27) 例をあげると、新戸遺跡J2号住、尾崎遺跡2、16、20号住、橋本遺跡SI31、36、37、38、43号住、宇津木台遺跡D地区SI12A、27、40、66号住、川尻遺跡J19号住、多摩ニュータウンNo300遺跡13号住、留原遺跡2号住、山根坂上遺跡5号住、精進バケ遺跡24、28号住、飛田給遺跡SI10号住など。
- 28) 釈迦堂遺跡でも、SIV区SB04の直列していた埋甕二つのうち、一つが斜行沈線紋土器の典型例(逆位底部穿孔埋甕)、もう一つが③のタイプの把手付土器(正位埋甕)であった(第13図1・2)。
- 29) ちなみにこの昭和18年の佐野氏の論文が、関東の曾利式土器を中部高地由来の土器と認識した最初であると思われ、分類的確さと共に、その卓見は驚きに値する。川名広文氏よりご教示。
- 30) この点について柳澤清一氏よりご教示を受けた。
- 31) 「口縁部文様帯をもち、胴部も綾杉状・斜行状をもって、非常に加曾利E式に器形的にも共通しているながら地文に縄文をもたない土器が、相模川流域に濃厚に入って来る、入って来るというか分布しているわけです。この土器はやはり神奈川から見た場合は、(中略)我々は仲間内では「あいのこ土器」ですとか「折衷様式」なんて呼び方をして曾利式土器の中でもちょっと特異なもんじゃないかなという見方をしているわけです。」(神奈川考古同人会1981、山本暉久氏発言)。
- 32) 他に橋本遺跡でSI42、45、40号住、多摩ニュータウンNo300遺跡9、10号住、宇津木台遺跡D地区SI54号住などがこの時期の資料を出している。
- 33) この点に関し、神奈川県丹沢湖畔の尾崎遺跡では、6、26、32、34号住がこの時期の遺構であるが、出土土器には口縁部紋様が沈線1本あるいは省略されているものが多い(第27図22~31)。尾崎は地理的に山梨すなわち曾利式分布の本場に近いからであろう。
- 34) たとえば、東京都東久留米市新山遺跡は加曾利E3式が主体となる集落であるが、ここには曾利新3式系統の土器はごくわずしか入っていない(井口・山崎ほか1981)。
- 35) ただし、柳澤氏自身はこの加曾利E2-3式についてまだ詳しく述べているわけではない。よって氏の認識と私の捉え方に差があることも考えられる。
- 36) 米田明訓氏が述べたように(1980)、1965年の『井戸尻』の成果は、天竜川水系の中期後半土器まで安易に曾利式と呼ぶような影響を残した。また、曾利式の呼称を用いずに、加曾利E式(期)と言及して

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）

いる報告書も多い。そのような中で天竜川流域で独自の土器編年を確立しようとした先駆的な業績として、八木充則氏による集落論の基礎としての4段階編年（八木1976）、末木健氏による下伊那地方の土器の4段階編年（末木1978）、神村透氏による下伊那地方に特徴的な結節縄紋土器群の編年（神村1978）などがある。

- 37) 私は、研究史から見て「唐草紋系土器」群全体に梨久保B式の名を冠することは妥当ではないかと考える。その場合、下伊那地方の土器を如何に梨久保B式に包括するかが問題となるであろう。
- 38) 百瀬氏の編年は氏自身が断わっているように、「唐草紋系土器」全体の編年を企図したのではなく、あくまでも殿村遺跡内部での土器の変遷を追うことを主眼としたものである。遺構での出土状態の在り方、つまり埋甕や床面土器、覆土の下層、上層といった出方を基準として段階設定したため、中期後半が13段階に分けられたが、これはやはり土器型式としては分けすぎであろう。
- 39) 居沢尾根では一つの尾根上に広がる遺跡全体の2/3が調査され、検出された住居址が28軒、しかもほとんど切合いが見られない。報告者によれば、井戸尻Ⅲ式期に構築された住居が4軒、曾利Ⅰ式（古）期が10軒、曾利Ⅰ式（新）期が9軒、そして曾利Ⅱ式期が5軒である。曾利Ⅰ式（新）期に「唐草紋系土器」の数が多くなり、ハヶ岳西南麓における唐草紋系と曾利系の文化圏自体の拮抗状況を物語っているとされる。
- 40) 樽形土器にしばしば伴出する第32図10のような土器の口縁部紋様は、前代の居沢尾根6号住タイプの土器の頸部紋様（渦巻紋と斜めや縦の沈線の組合せ、第31図7・8・10）が口縁部に移ったものであろう。
- 41) ただし加曾利E2式～E2-3式期に、「唐草紋系土器」と加曾利E式を折衷したような土器群が東信地方にローカルなものとして存在しているらしい。例えば小諸市郷土遺跡（整理中であるが桜井秀雄氏のご好意により見学させていただく）、御代田町宮平遺跡（大井1994）などから良好な資料が出土している。
- 42) 上田市と長野市の間位置する埴科郡戸倉町円光房遺跡は、敷石住居址や弧状列石址などの配石遺構からなる遺跡である（原田・森嶋1990）。遺跡出土の土器変遷を曾利Ⅰ～Ⅴ期というスケールにしたがって説明しており、興味深いことに、あえて「曾利Ⅵ期」という時期を設定し、加曾利E4式を属させている。この遺跡でも中期最終末には唐草紋系の土器をとまなっていない。
- 43) 赤山容造氏が中期後半初頭の三原田式について述べた時に、この時期の特徴として述べたことだが、加曾利E1式でさえ一つの小地域型式に過ぎなかったという捉え方はおもしろい（赤山1990）。この時期の同じような状況は、信濃について戸田哲也氏の論文に見ることができる（戸田1995）。
- 44) 曾利式の一類型である斜行沈線紋土器は、加曾利E式分布圏の中によく取り入れられ、様々な形に変容しながら加曾利E2-3式～E3式（前半）と共伴している。特に東関東の加曾利E3式の中では、斜行沈線紋土器が加曾利E式独自の類型となって定着した。ただし、その曾利式系の斜行沈線紋の土器が、加曾利E式の型式変遷に影響を与えたことはなかった。斜行沈線紋土器は様々な問題を内包しているものであり、私はこの土器について別稿を用意して論じたいと思っている。
- 45) 長野県東信地域の土器について、桜井秀雄氏、広瀬昭弘氏、堤隆氏のご教示から得たところが大きい。ただし本稿で述べたことの責任は全て筆者にある。

山形 真理子

引用・参考文献

- 会田進・唐木孝雄ほか 1986 『梨久保遺跡（第5次～11次発掘調査報告）』岡谷市教育委員会
青木健二 1981 『上の原遺跡』日本窯業史研究所
青木豊・竹崎真夫ほか 1981 『調布市入間町城山遺跡』調布市教育委員会・調布市遺跡調査会
青沼博之ほか 1981 「居沢尾根遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村その4－』長野県教育委員会
青沼博之・百瀬忠幸ほか 1987 『殿村遺跡』山形村教育委員会
赤山容造 1990 「三原田式土器について」『三原田遺跡 第2巻』498-508頁 群馬県企業局
秋山道生 1985 「縄文時代中期後半における弧線文の系譜－関東地方以西を中心として－」古代第80号 178-213頁
浅川利一・戸田哲也・笹村省三 1970 「八幡平遺跡調査報告」多摩考古第10号 1-27頁
安孫子昭二・可児通宏ほか 1988 『多摩ニュータウン No57遺跡』東京都教育委員会
安孫子昭二・佐藤攻ほか 1974 『貫井南』小金井市貫井南遺跡調査会
石坂茂・藤巻幸男・桜岡正信 1988 「加曾利 E 式土器に関する一考察－いわゆる「胴部隆帯文土器」の系譜－」『群馬の考古学』115-150頁 群馬県考古学資料普及会
石塚和則ほか 1986 『将監塚－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井口直司・山崎丈ほか 1981 『新山遺跡』新山遺跡調査会・東久留米市教育委員会
伊藤公明 1988 『方城第1遺跡』大泉村教育委員会
伊藤公明 1989 『大和田遺跡・大和田第2遺跡』大泉村教育委員会
伊藤富治夫 1979 『小金井市貫井遺跡』小金井市貫井遺跡調査会
伊藤富治夫・中山真治ほか 1987 『中山谷遺跡－第9次～11次調査－』小金井市中山谷遺跡調査会
今福利恵・山本茂樹 1992 『甲ッ原遺跡概報 I』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第71集 山梨県教育委員会
今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究（上）（下）」考古学雑誌第63巻第1号 1-29頁，同第2号 22-47頁
岩瀬彰利 1994 「連弧文土器小考」転機5号 13-38頁
植木弘・植木智子 1987・88 『行司免遺跡』嵐山町遺跡調査会報告4 嵐山町遺跡調査会
上野佳也ほか 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡 総集編』軽井沢町教育委員会
宇賀神恵・百瀬忠幸ほか 1990 『四日市遺跡』小県郡真田町教育委員会
馬橋利行ほか 1990 『南養寺遺跡－VII－』国立市遺跡調査会・国立市教育委員会
漆畑稔・鳥海嘉奈子ほか 1986 『仲道 A 遺跡』大仁町教育委員会
漆畑稔ほか 1990 『公蔵免遺跡発掘調査報告書』大仁町教育委員会
大井源寿 1994 「宮平遺跡の中期縄文土器」佐久考古通信 No63 5-8頁
大上周三・御堂島正・山本孝司ほか 1988 『新戸遺跡（第1分冊）』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 17 神奈川県立埋蔵文化財センター
大川敬夫・新井正樹ほか 1990 『冷川遺跡』清水市教育委員会
大塚昌彦・小林良光ほか 1987 『行幸田山遺跡』渋川市教育委員会
大場磐雄・永峯光一・八幡一郎ほか 1955 『平出』朝日新聞社
大貫英明・小西雅徳ほか 1986 『橋本遺跡VII（縄文時代編）』相模原市橋本遺跡調査会
岡田正彦ほか 1975 「荒神山遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市その3－』長

野県教育委員会

- 岡田義樹ほか 1987 『高ヶ坂南遺跡』町田高ヶ坂南遺跡調査団
- 岡本勇 1963 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（二）」横須賀市博物館研究報告（人文科学）第7号 17-34頁
- 岡本孝之ほか 1977 『尾崎遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告13 神奈川県教育委員会
- 岡本孝之・小林謙一ほか 1983 『早川天神森遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター
- 小田静夫・伊藤富治夫ほか 1977 『前原遺跡』前原遺跡調査会
- 小野崎満・赤城高志ほか 1983 『調布市飛田給遺跡』調布市埋蔵文化財調査報告20 調布市教育委員会・調布市遺跡調査会
- 小野真一・白石竹雄 1969 「田方郡修善寺町入谷平遺跡緊急発掘調査概報」静岡県文化財調査報告第8集
- 小野真一ほか 1971 「中峰遺跡」「桜畑上遺跡」「桜畑下遺跡」「上長窪遺跡群」長泉町教育委員会
- 小野真一ほか 1975 『千居』加藤学園考古学研究所
- 小野真一・長倉紫朗・石合紘一 1979 『年川前田』修善寺町教育委員会
- 小野正文ほか 1974 『辻遺跡と薊在家遺跡』山梨県教育委員会・山梨県遺跡調査団
- 小野正文ほか 1979 「三光遺跡」『御坂町の埋蔵文化財』御坂町教育委員会
- 小野正文ほか 1986 『釈迦堂Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集 山梨県教育委員会
- 小野正文・山形真理子 1987 『釈迦堂Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集 山梨県教育委員会
- 折井敦 1980 『教来石民部館跡』白州町教育委員会
- 河西学・榊原功一・大村昭三 1989 「八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析」帝京大学山梨文化財研究所研究報告第1集 1-64頁
- 河西学 1992 「岩石鉱物組成からみた縄文土器の産地推定」帝京大学山梨文化財研究所研究報告第4集 61-90頁
- 神奈川考古同人会縄文研究グループ 1978 『神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案 第Ⅰ版』神奈川考古第4号
- 神奈川考古同人会・中部高地土器集成グループほか 1980 『シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曾利E式と曾利式土器の関係について—土器資料集成図集』神奈川考古第10号
- 神奈川考古同人会ほか 1981 『シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曾利E式と曾利式土器の関係について—』神奈川考古第11号
- 可児通宏・安孫子昭二ほか 1971 『平尾遺跡調査報告書』平尾遺跡調査会
- 可児通宏・塩野崎直子ほか 1994 『多摩ニュータウン遺跡—No300遺跡—』東京都埋蔵文化財センター調査報告第16集 東京都埋蔵文化財センター
- 可児通宏・塩野崎直子ほか 1995 『多摩ニュータウン遺跡—No67遺跡—』東京都埋蔵文化財センター調査報告第18集 東京都埋蔵文化財センター
- 金子浩之 1994 「伊豆を中心とした縄文中期後半土器の様相」『地域と考古学』133-146頁 向坂鋼二先生還暦記念編集刊行会
- 金子直行・樋口誠司ほか 1982 『大山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第17集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鎌木義昌編 1965 『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社
- 神村透 1978 「結節縄文をつけた一群の土器」『中部高地の考古学』105-135頁
- 唐木孝雄・大竹憲昭・寺内隆夫ほか 1988 「上木戸遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査—塩尻市内その1—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2 長野県教育委員会・長野埋蔵文化財センター
- 桐原健・宮坂光昭ほか 1968 『海戸』長野県考古学会

山形 真理子

- 桐生直彦 1981 「連弧文土器」『縄文文化の研究』4 93-102頁 雄山閣
- 櫛原功一 1986a 『姥神遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告第5集 大泉村教育委員会
- 櫛原功一 1986b 「大泉村姥神遺跡出土の唐草文土器について」丘陵第12号 31-36頁
- 櫛原功一 1993 「曾根Ⅰ式土器の再検討—山梨県大泉村姥神遺跡の資料をもとに—」縄文時代第4号 1-19頁
- 栗野克己・外岡龍二 1979 『河津町見高段間遺跡第二次調査概報』河津町教育委員会
- 栗野克己 1990 「段間遺跡」『静岡県史』静岡県
- 栗原文蔵ほか 1962 「大蔵遺跡」『新修世田谷区史』付編 世田谷区役所
- 黒尾和久・藤野修一ほか 1989 『宇津木台遺跡群Ⅲ』八王子市宇津木台地区遺跡調査会
- 黒尾和久 1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（Ⅰ）」論集宇津木台第1集 11-76頁
- 気賀沢進 1977 『丸山南遺跡』南信土地改良事務所・駒ヶ根市教育委員会
- 気賀沢進 1988 『辻沢南遺跡』駒ヶ根市土地開発公社・駒ヶ根市教育委員会
- 河野実・小出義治・浅川利一ほか 1972 『鶴川遺跡群』町田市教育委員会 雄山閣
- 甲元真之・岩崎卓也ほか 1971 『仲町遺跡』仲町遺跡発掘調査団
- 後藤守一 1933 「榑原石器時代住居遺蹟」「西秋留石器時代住居遺蹟」『東京府史蹟保存物調査報告書』第十冊 東京府
- 小林公明・武藤雄六・樋口誠司ほか 1988 『唐渡宮』富士見町教育委員会
- 小林広和・里村晃一ほか 1978 『安道寺遺跡調査報告書』山梨県教育委員会
- 小林広和・里村晃一ほか 1984 『牛輿遺跡調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第2集 山梨県教育委員会
- 小林広和・里村晃一 1989 『一の沢遺跡調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第42集 山梨県教育委員会
- 小林康男ほか 1986 『長野県塩尻市俎原遺跡発掘調査概報』塩尻市教育委員会
- 小林康男・大久保知己ほか 1988 『荒海渡遺跡発掘調査報告書』南安曇郡梓川村教育委員会
- 小林康男・鳥羽嘉彦ほか 1984 「柿沢東遺跡」『塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書—昭和58年度—』塩尻市教育委員会
- 小林康男・三村洋ほか 1985 『山ノ神』塩尻市教育委員会
- 斎藤武一・丸子亘・植木律文 1985 『黒川丸山遺跡』川崎市水道局
- 坂詰秀一 1965 『新座』跡見学園
- 桜井清彦・原信之 1968 「神奈川県伊勢原町横手原出土の底部穿孔土器について」考古学雑誌第54巻第2号 24-33頁
- 佐々木克典・藤野奈緒美ほか 1988 『南八王子地区遺跡調査報告4 滑坂遺跡』八王子南部地区遺跡調査会
- 佐々木克典・井上晃夫ほか 1992 『向郷遺跡』立川市向郷遺跡調査会
- 笹森健一ほか 1977 『上越新幹線埋蔵文化財報告Ⅰ 前畠・島ノ上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集 埼玉県教育委員会
- 佐野大和 1943 「横濱市青ヶ臺の石器時代遺蹟」古代文化第14巻第7号 16-34頁
- 塩入秀敏・堀田雄二ほか 1985 『成立遺跡』小県郡東部町教育委員会
- 重久淳一・木崎道昭・広瀬雄一ほか 1986 『奈良地区遺跡群Ⅰ（上巻）』奈良地区遺跡調査団
- 芝崎孝 1971 「長野県曾利遺跡調査報告に関する疑問—「資料の史料化」をはかるために—」下総考古学 41-7頁
- 渡江芳浩ほか 1981 『山根坂上遺跡』羽村町羽ヶ田上・山根坂上遺跡調査会
- 渋谷昌彦 1990 「萩ノ段遺跡」『静岡県史』静岡県

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）

- 渋谷昌彦・坂巻隆一ほか 1989 『東鎌塚原遺跡発掘調査報告書』島田市教育委員会
- 篠原修二・内藤朝雄 1991 『牛岡遺跡 平成2年度日坂バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 島田恵子ほか 1982 『上の林遺跡』上伊那郡箕輪町教育委員会
- 島田哲男ほか 1982 『松本市内田雨掘遺跡』松本市教育委員会
- 清水博ほか 1985 『上の山遺跡』榊形町教育委員会
- 白石浩之 1978 「加曾利E式土器の変遷」考古学研究第25巻第1号 70-80頁
- 白石浩之ほか 1977 『当麻遺跡・上依知遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告12 神奈川県教育委員会
- 城近憲市ほか 1969 『船田 東京都八王子市船田遺跡における集落址の調査I』八王子市船田遺跡調査会
- 城近憲市・並木隆ほか 1972 『宮地遺跡』狭山市文化財調査報告I 狭山市教育委員会
- 新谷和孝ほか 1990 『松本市坪ノ内遺跡』松本市教育委員会
- 新谷和孝ほか 1991 『松本市南中島遺跡』松本市教育委員会
- 新藤康夫 1976 「加曾利E式土器細分の再検討」考古学雑誌第62巻第3号 12-22頁
- 新藤康夫・服部敬史ほか 1975 『下寺田・要石遺跡』八王子市下寺田遺跡調査会
- 新藤康夫ほか 1979 『栲田遺跡群-1978年度調査概報』八王子市栲田遺跡調査会
- 末木健 1976 「伊那谷中部縄文中期後半の土器とその性格」信濃第30巻第4号 26-37頁
- 末木健 1981 「曾利式土器」『縄文文化の研究』4 84-92頁 雄山閣
- 末木健 1984 「曾利式土器圏縁辺部の様相」山梨考古第14号
- 末木健 1988 「曾利式土器様式」『縄文土器大観』3 271-275頁 小学館
- 末木健ほか 1975 「柳坪遺跡A地区・柳坪遺跡B地区・頭無遺跡」『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-北巨摩郡長坂・明野・韭崎地内-』山梨県考古学研究会
- 末木健ほか 1987 『金の尾遺跡・無名墳（きつね塚）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集 山梨県教育委員会
- 鈴木敏宏・藤塚明・福田定信ほか 1971 『そとごう遺跡調査概報』考古学資料刊行会
- 鈴木保彦 1977 『下北原遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告14 神奈川県教育委員会
- 鈴木保彦 1981 「勝坂式土器」『縄文土器大成』2 中期 148-157頁 講談社
- 鈴木保彦・樋口昇一 1981 「曾利式土器」『縄文土器大成』2 中期 160-162頁 講談社
- 鈴木保彦・山本暉久 1988 「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観』2 325-329頁 小学館
- 杉山荘平 1965 「茨城県新治郡出島村岩坪貝塚調査概報」史観第72冊 79-93頁
- 関沢聡・島田哲男ほか 1993 『松本市山影遺跡』松本市教育委員会
- 関根孝夫・滝沢亮ほか 1987 「上坂東遺跡」『比々多遺跡群』比々多第一地区遺跡調査団
- 芹沢清八ほか 1986・1987 『御城田遺跡（遺構・遺物実測図編）・（本文編）』栃木県埋蔵文化財調査報告書第68集 栃木県文化振興事業団
- 高林均・小田静夫ほか 1974 『平山橋遺跡』東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会
- 高見俊樹・三上徹也ほか 1983 『穴場I』諏訪市教育委員会
- 田代孝 1986 『郷蔵地遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第31集 山梨県教育委員会
- 谷井彪・今泉泰之 1974 「花影」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
- 谷井彪・宮崎朝雄・大塚孝司ほか 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982 1-137頁 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井彪 1987 「塚原遺跡の曾利式土器について-中部高地における文様の系譜-」埼玉県立歴史資料館研究紀要第9号 89-122頁
- 谷藤保彦・関根慎二編 1989 『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所

山形 真理子

- 谷口一夫 1973 『上石田遺跡』甲府市教育委員会
- 中部高地縄文土器集成グループ 1979 『中部高地縄文土器集成 第1集 縄文中期後半の部 その1』
- 勅使河原彰 1992 「縄文時代の社会構成—八ヶ岳西南麓の縄文時代中期遺跡群の分析から— (上) (下)」
考古学雑誌第78巻第1号 1-44頁, 第78巻第2号 1-27頁
- 寺内隆夫・野村一寿 1986 「中期後葉土器」『長野県史考古資料編』全1巻(4) 91-93頁 長野県史刊行会
- 寺村光晴 1966 『蟹ヶ沢・鈴鹿遺跡』座間町教育委員会
- 戸田哲也・奥隆行 1977 「都留市海戸遺跡出土土器と中期末編年に就て」丘陵1-3・4合併号 1-12頁
- 戸田哲也 1980 「加曾利 E 式土器編年の現状と課題」『シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題 問題提起・地域別報告 発表要旨』神奈川考古第10号別冊 14頁
- 戸田哲也ほか 1993 『中野山越遺跡発掘調査報告書』吉城郡古川町教育委員会
- 戸田哲也 1995 「中野山越 A 2 類土器論」先史考古学研究第5号 59-77頁
- 鳥居龍蔵 1936 「大島熔岩流下石器時代遺跡」科学知識第16巻第5号 79-81頁
- 直井雅尚・平林彰ほか 1984 『松本市前田木下遺跡』松本市教育委員会
- 長崎元広 1973 「八ヶ岳西南麓の縄文中期集落における共同祭式のありかたとその意義 (上) (下)」信濃第25巻第4号 14-35頁, 同第25巻第5号 72-89頁
- 長崎元広 1980 「山梨・長野における中期後半の各期の様相」『シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題 問題提起・地域別報告 発表要旨』神奈川考古第10号別冊 14-17頁
- 長沢宏昌 1986a 「曾利 I 式大渦巻把手成立の一要因」『山梨考古学論集』I 117-137頁
- 長沢宏昌 1986b 「一の沢西遺跡」『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第16集 山梨県教育委員会
- 長沢宏昌 1987 『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集 山梨県教育委員会
- 中野良一・早川泉・谷口栄ほか 1985 『清水が丘遺跡』府中市遺跡調査会
- 中山誠二 1987 「上野原遺跡」『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第19集 山梨県教育委員会
- 中山誠二 1988 『関山遺跡 I』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第36集 山梨県教育委員会
- 中山誠二ほか 1993 『宿尻遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第81集 山梨県教育委員会
- 並木隆 1983 「白旗塚遺跡」『柳瀬川流域遺跡群 (I)』所沢市教育委員会
- 奈良泰史 1980 「山梨県東部—桂川流域—の火山堆積物と遺跡」考古学ジャーナル No178 39-44頁
- 奈良泰史 1986 「牛石遺跡」『都留市史 資料編』地名・考古 322-338頁 都留市
- 奈良泰史・奥山和久ほか 1986 「久保地遺跡」『都留市史 資料編』地名・考古 261-314頁 都留市
- 奈良泰史 1987 『牛石遺跡』都留市教育委員会
- 奈良泰史・小佐野保子 1993 『宮の前遺跡発掘調査報告』西桂町教育委員会
- 能登健 1975 「縄文文化解明における地域研究のあり方」信濃第27巻第4号 43-56頁
- 能登健・石坂茂 1980 「重弧文土器の系譜」信濃第32巻第4号 60-76頁
- 野田昭仁 1983 『上萩原遺跡』東山梨郡三富村教育委員会
- 橋口定志・紀野自由ほか 1978 『二宮遺跡 1976』秋川市埋蔵文化財調査報告書第5集 秋川市教育委員会
- 橋口尚武 1983 「加曾利 E 式土器の研究史的考察」考古学雑誌第69巻第1号 56-73頁
- 橋口尚武・高橋健樹ほか 1984 『吉祥山』武蔵村山市教育委員会
- 服部敬史ほか 1971 「東京都狐塚遺跡の調査」長野県考古学会誌第11号 1-21頁
- 林原利明・小池聡 1987 『藤野町嵯峨遺跡』藤野町教育委員会
- 原嘉藤・樋口昇一・中島豊晴ほか 1970 「長野県塩尻市小丸山遺跡緊急発掘調査報告」長野県考古学会誌第8号 33-51頁

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）

- 原田政信・森嶋稔 1990 『円光房遺跡』埴科郡戸倉町教育委員会
- 林茂樹・酒井幸則ほか 1982 『勝間一堀遺跡』上伊那郡高遠町教育委員会
- 伴信夫・平出一治ほか 1973 「荒神山遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市内その1・その2—』長野県教育委員会
- 樋口昇一・横山正・小松虔 1964 「長野県東筑摩郡朝日村熊久保遺跡調査概報（一）（二）」信濃第16巻第4号 17-30, 同第7号 1-18頁
- 平川昭夫・亀田宗宏 1990 『上山地遺跡埋蔵文化財発掘調査報告』長泉町教育委員会
- 平子順一・廣瀬有紀雄ほか 1984 『上白根おもて遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 平野修 1985 『根古屋遺跡』白州町教育委員会
- 平野修・櫛原功一ほか 1992 『宮ノ前遺跡』韭崎市教育委員会
- 平野吾郎・鈴木裕篤・関野哲夫ほか 1979 『上白岩遺跡発掘調査報告書』中伊豆町教育委員会
- 平林彰 1990 「中部高地の中期最終末及び後期初頭の土器群」『特集 称名寺式土器に関する交流研究会の記録』調査研究集録第7冊 114-119頁 横浜市埋蔵文化財センター
- 平林彰ほか 1993 『中央自動車長野線埋蔵文化財文化財発掘調査報告書11 北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター・長野県教育委員会
- 平林将信 1984・85 『天間沢遺跡Ⅰ（遺構編）・Ⅱ（遺物・考察編）』富士市教育委員会
- 平松康毅・田代孝ほか 1977 『大月遺跡（Ⅰ）』山梨県教育委員会
- 肥留間博・土井義夫ほか 1971 『中山谷』小金井市文化財調査報告1 小金井市教育委員会
- 肥留間博・J. E. キダー・小田静夫ほか 1975 『中山谷遺跡』国際基督教大学考古学研究センター
- 広瀬昭弘・秋山道生ほか 1978 『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ』恋ヶ窪遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 広瀬昭弘・秋山道生ほか 1980 『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ』恋ヶ窪遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 広瀬昭弘・秋山道生ほか 1982 『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ』恋ヶ窪遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 広瀬昭弘ほか 1988 『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅳ』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 福島邦夫ほか 1989 『平石遺跡』北佐久郡望月町教育委員会
- 藤沢宗平・土屋長久ほか 1971 「洞遺跡」『唐沢・洞』長野県考古学会
- 藤沢宗平ほか 1934 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻上 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会
- 藤森栄一・武藤雄六 1964 「信濃境曾利遺跡調査報告」長野県考古学会誌創刊号
- 藤森栄一編 1965 『井戸尻』中央公論美術出版
- 藤森栄一 1969 「縄文中期文化 中部日本」『新版考古学講座』第3巻 141-159頁 雄山閣
- 藤森栄一・武藤雄六・戸沢充則ほか 1965 「シンポジウム 中期縄文文化の諸問題」長野県考古学会誌第3号 17-38頁
- 古谷健一郎 1989 『一の沢・金山遺跡』境川村埋蔵文化財発掘調査報告書第4輯 境川村教育委員会
- 保坂裕史・森原明廣 1992 『塩川遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第70集 山梨県教育委員会
- 堀越正行 1972 「加曾利EⅢ式土器研究史（一）（二）（三）」信濃24-2 59-70頁, 同24-3 65-79頁, 同24-4 16-25頁
- 前田秀則・山村貴輝 1993 「縄文時代中期後半から後期初頭の土器について」『木曾森野遺跡Ⅱ—旧石器・縄文時代編—』町田木曾森野地区遺跡調査会
- 松戸市教育委員会 1978 『子和清水貝塚 遺物図版編』松戸市文化財調査報告第8集
- 松戸市教育委員会 1985 『子和清水貝塚 遺物図版編』松戸市文化財調査報告第11集
- 松村恵司 1975 「井戸尻編年とその問題点」Circum-Pacific 2 52-60頁
- 馬目順一ほか 1975 『大畑貝塚調査報告』福島県・いわき市教育委員会
- 三上徹也 1986a 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」長野県

山形 真理子

考古学会誌第51号 1-48頁

- 三上徹也 1986b 「唐草文土器の成立とその分布」歴史手帖142 19-27頁
三上徹也 1988 「唐草文系土器様式」『縄文土器大観』3 276-278頁 小学館
御堂島正ほか 1992 『川尻遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告23 神奈川県立埋蔵文化財センター
御堂島正・恩田勇ほか 1992 『三ヶ木遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告26 神奈川県立埋蔵文化財センター
宮井英一 1989 『古井戸-縄文時代-』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮坂虎次・守矢昌文・鶴飼幸雄 1978 『よせの台遺跡』茅野市教育委員会
宮坂光昭ほか 1970 『茅野和田遺跡緊急発掘調査報告書』茅野市教育委員会
宮坂光昭ほか 1972 『梨久保遺跡(第三・四次発掘調査報告)』岡谷市教育委員会
宮崎朝雄 1982 「中期土器群編年研究史」『研究紀要』1982 13-20頁 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
武藤雄六 1965 「長野県諏訪郡富士見町大畑遺跡第三次調査報告」長野県考古学会誌第3号 39-56頁
武藤雄六 1965 「中期縄文土器の蒸器-櫛形文土器の変遷と意義-」信濃第17巻第7号 35-44頁
武藤雄六・小林公明ほか 1978 『曾利』富士見町教育委員会
森和敏 1977 「塩山市上萩原殿林遺跡出土の縄文式土器」甲斐路第30号 52-53頁
森田安彦ほか 1987 『留原』都道32号線留原遺跡調査会
森田安彦ほか 1990 『精進バケ』羽村町精進バケ遺跡調査会
守矢昌文・鶴飼幸雄ほか 1990 『棚畑』茅野市教育委員会
八木光則 1976 「縄文中期集落の素描(1)(2)-信濃伊那谷における集落共同体をめぐって-」長野県考古学会誌25 1-36頁, 同26 29-41頁
山形真理子 1989a 「曾利式編年の再編成のために」東京の遺跡 No23 6-7頁
山形真理子 1989b 「曾利式土器における施文順序の意義」『甲斐の成立と地方的展開』52-65頁 角川書店
山下孝司 1989 『後田遺跡』韭崎市教育委員会
山下孝司 1990 『北後田遺跡』韭崎市教育委員会
山田瑞穂・八木光則ほか 1974 「樋口内城館址遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-上 伊那郡辰野町その2-』長野県教育委員会
山内清男 1940 『日本先史土器図譜』第IX輯 加曾利E式 先史考古学会
山内清男 1964 「V 文様帯系統論」『日本原始美術1 縄文式土器』157-158頁 講談社
山本孝司 1992 「加曾利E3-4式と曾利V式について」古代第94号 59-84頁
山本孝司 1993 「神奈川県における加曾利E式の変遷について-神奈川編年案の再検討より-」神奈川考古第29号 25-58頁
柳澤清一 1980 「大木10式土器論」『古代探叢』55-77頁 早稲田大学出版部
柳澤清一 1985 「加曾利E式土器の細別と呼称(前篇)」古代第80号 155-177頁
柳澤清一 1986a 「竜ヶ崎市南三島遺跡出土の土器」古代第81号 84-96頁
柳澤清一 1986b 「加曾利E式土器の細別と呼称(中篇)」古代第82号 93-142頁
柳澤清一 1990 「大木9-10式土器論(上)」先史考古学研究第3号 45-87頁
柳澤清一 1991a 「加曾利E3-4(中間)式考」『古代探叢Ⅲ』93-136頁 早稲田大学出版部
柳澤清一 1991b 「神奈川県加曾利E式後半編年の再検討」古代第92号 141-196頁
柳澤清一 1992 「加曾利E(新)式編年研究の現在」古代第94号 19-58頁
柳澤清一 1993 「大木9-10式土器論(下)」先史考古学研究第4号 1-23頁

曾利式土器の研究——内的展開と外的交渉の歴史——（下）

- 八幡一郎 1976 『信濃大深山遺跡』川上村教育委員会
- 吉田格 1956 「東京都国分寺町恋ヶ窪竪穴住居址の土器に就て」銅鐸第12号 8-13頁
- 吉田格 1973 『関東の石器時代』雄山閣
- 吉田浩明・麻生順司ほか 1986 『八王子市子安町子安3丁目遺跡』玉川文化財研究所
- 米田明訓 1978 「曾利式土器編年の基礎的把握」長野県考古学会誌30 1-17頁
- 米田明訓 1980a 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」甲斐考古17の1 1-47頁
- 米田明訓 1980b 「曾利式土器編年の現状と課題」『シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題 問題提起・地域別報告 発表要旨』神奈川考古第10号別冊 5-7頁
- 米田明訓 1986 『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集 山梨県教育委員会
- 綿田弘実 1988 「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」長野県埋蔵文化財センター紀要2 76-89頁
- 和田哲 1981 『長沢』福生市教育委員会

山形 真理子

図の出典

第1図～第3図：藤森編1965より 第4図：神奈川考古同人会・中部高地土器集成グループほか1980より
第5図：末木ほか1975, 米田1986より 第9図：小野・山形1987, 長沢1986b・1987, 中山1987より 第10
図：小野・山形1987より 第11図：小野・山形1987, 小野ほか1979より 第12図：小野・山形1987, 小林・里
村ほか1978より 第13図：小野・山形1987, 長沢1987, 中山ほか1993, 山下1990より 第14図：小野・山形
1987より 第15図：小野・山形1987, 山下1989より 第16図：小野・山形1987, 山下1989・1990より 第17
図：末木ほか1987, 小野・山形1987, 平野・榑原ほか1992, 古谷1989より 第18図：藤森編1965, 小林・武
藤・樋口ほか1988, 小野・山形1987, 奈良・奥山ほか1986, 平林1985より 第22図：小林・武藤・樋口ほか
1988より 第23図：白石ほか1977, 黒尾・藤野ほか1989, 大貫・小西ほか1986, 林原・小池1987, 関根・滝沢
ほか1987より 第24図：白石ほか1977より 第25図：御堂島ほか1992, 佐々木・藤野ほか1988, 橋口・紀野ほ
か1978より 第26図：白石ほか1977, 広瀬・秋山ほか1982より 第27図：大上・御堂島・山本ほか1988, 岡本
ほか1977より 第28図：大貫・小西ほか1986, 白石ほか1977, 大上・御堂島・山本ほか1988, 可児・安孫子ほ
か1971より 第29図：岡田ほか1975, 宮坂ほか1970より 第30図：宮坂ほか1970・1972より 第31図：青沼ほ
か1981, 会田・唐木ほか1986より 第32図：青沼・百瀬ほか1987, 会田・唐木ほか1986より 第33図：守矢・
鶴飼ほか1990, 新谷ほか1990, 小林・鳥羽ほか1984, 唐木・大竹・寺内ほか1988より 第34図：小林・大久保
ほか1988, 原・樋口・中島ほか1970, 小林・三村ほか1985, 平林ほか1993より

Regional and temporal interactions and their significance for the stylistic changes found in the Sori Pottery Type, Middle Jomon Period(II).

YAMAGATA Mariko

In this paper, the author provides a comprehensive study of the Sori pottery type, which, can be assigned to the latter half of the Middle Jomon period. The general methodology of the paper is (1) to outline the variety and complexity of the pottery type, (2) to provide a chronological framework for the different categories within the pottery type, and (3) explain and interpret how and why the stylistic transformations occur. In her conclusion, the author underlines the significance of the transformations, especially from the viewpoint of the structural interrelations among pots. These interrelations are discussed both internally (within the Sori type) and externally (with other types).

The Sori type is one of the Middle Jomon types which is characteristically quite heavily ornated and abundant in its variety of forms and decorations. The type was first brought to eminence in 1965 in an archaeological report titled "IDOJIRI" (Fujimori et al. 1965). Idojiri is a large cluster of settlement sites mainly from the Middle Jomon, which are located in a small mountain town in Nagano prefecture. The type site Sori can be found in the cluster (Fig. 20, Map C-site No. 16).

Reviewing the currently available research results on the Sori type, the author believes that not enough attention has been paid to understanding the structural interrelations between the Sori type and the two types from the same time period that have been found in neighboring locations. These are the eastern Kasori E type (the type site is the Kasori shell midden site, Chiba Prefecture) and the provisionally named western "Karakusamonkei" type. It is the author's view that especially the Kasori E type had a substantial influence on the transformation of the Sori type.

In order to reorganize the chronological framework for the Sori type, the author has defined the categories of the traditional Sori pots and then examined the characteristics of the method and the order of ornamentation (Fig. 6 ~ 8). In the course of the discussion on chronology, the author pays special attention to the spatial extent of the Sori type, and at the same time to the differences in phenomena of the materials found in the central and peripheral areas of distribution.

The original and traditional stylistic changes of Jomon pottery types are often more explicit in the central areas of distribution than in the peripheral areas where external influences frequently cause a mixture of the characteristics of two or more types. Furthermore, the problems arising from and the implications associated with the findings in the central and peripheral areas of distribution are different.

In the case of the Sori type, the sphere of distribution occupies part of Chubu Sangaku Chitai (a mountainous region in central Japan). It appears that the most significant central area of distribution was located in the Kofu basin (Fig. 20, Map D) with sites extending along or close to several rivers in the mountainous area.

The author's chronological framework is mainly derived from a large collection of pots from the Shakado site complex which is located at the eastern edge of the Kofu basin (Fig. 20, Map D-site No. 14). The site is one of the largest settlement sites so far found in the distribution sphere of the Sori type. The author has divided the chronology of the Sori type into two major phases, Sori-Ko and Sori-Shin which are respectively divided into 3 further phases < Sori-Ko 1 (Fig. 10), Sori-Ko 2 (Fig. 11, 12), Sori-Ko 3 (Fig. 13) and Sori-Shin 1 (Fig. 14), Sori-Shin 2 (Fig. 15), Sori-Shin 3 (Fig. 16) >. Some of the materials found by the author at the above sites clearly must be assigned to the very end of the Middle Jomon, and after Sori-Shin 3, however, the materials have not yet with certainty been classified as Sori type. Nonetheless, the author has preliminarily added two more stages < Kan- enoo, Ichinosawa Pit Dwelling No. 1 (Fig. 17) > to the above classification of Sori-Ko and Sori-Shin, as she believes the last stage, Ichinosawa, will be included into the Kasori E type.

In her discussion the author proceeds with the problem of a Sori type sub-category called the "Sori Jomon Kei" (Fig. 18). This category should be distinguished from the traditional kind of Sori pots, in terms of both the prevalent forms and decorations. For example, on the "Sori Jomon Kei" pots, cord-impressions (*jomon*; Japanese) are dominant, in contrast to the Sori type itself, which originally had decorations created by bamboo rods. Apparently the cord impression of the "Sori Jomon Kei" was adapted from the Kasori E type, the findings of which were spread over the Kanto plain (Fig. 23~28). It is quite interesting to understand the process of interactions between the Sori and the Kasori E type. These two types originally had completely independent structures. However a period of intense interaction, from Sori-Ko 3 to Sori-Shin 1, led both to a merging of characteristics and to a proliferation of new categories. As shown by an assemblage of pots from the Pit Dwelling No. 72 of the Taima site, Kanagawa prefecture (Fig. 26 No. 1~12).

After the “interactive” phase, the Sori type obtained a new structure with two established decorative zones (I. lateral zone in a rim + II. vertical zone in a body). Using this as an indicator, the author divided the Sori-Shin (new Sori) type from the Sori-Ko (archaic Sori) type. Because the Sori-Shin type got the same zonal structure for decoration as the Kasori E type, the two types became to show similar appearance. The variety of categories within the Sori type became less. It is viable to say that the history of the Sori type was the process of a reduction of its independent identity, through the sequential adoption of characteristics of the Kasori E type.

The interrelationships between the “Karakusamonkei” (Fig. 29~33) and the Sori type do not appear as significant as the relationship between the Sori type and the Kasori E type even though the “Karakusamonkei” type has the same roots as Sori (the Katsusaka type, e.g. Fig. 9) and developed in a similar ecological background. It is difficult to understand why there should have been less interactions between the two types unless one assumes that there was a conscious decision on the part of the Sori type people to adopt and share the Kasori E type values.

At the very end of the Middle Jomon Period, over the Chubu mountainous and the Kanto plain regions, the number of settlement sites and the resultant finds of artifacts showed a sharp decline. At this stage, both the Sori and the “Karakusamonkei” type had disappeared, but the Kasori E 4 type pottery could still be found in small numbers in the former Sori and “Karakusamonkei” spheres.

The collapse of the Middle Jomon culture and society reflects the process of stylistic transformation of the Sori type. The Sori type had shown prominent originality and many masterpieces were produced in the period of the Sori-Ko type. However, through the period of the Sori-Shin type the pottery gradually lost its independent characteristics. Therefore, the author points out that in order to understand the significance of the transformation of the Sori type, a detailed investigation of the interrelations with other pottery types, especially to the Kasori E type, is necessary.